

---

# 水無月の夕立～青潟大学附属シリーズ中学編

舞夜じょんぬ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

水無月の夕立～青鶴大学附属シリーズ中学編

### 【Zコード】

Z6867E

### 【作者名】

舞夜じょんぬ

### 【あらすじ】

中学二年・六月。立村上総は一年続けてクラスの評議委員をつとめることになった。同級生の清坂美里も一緒だった。自分のできる限り精一杯、クラスに受け入れられるよう努力してきたつもりだった。まだ恋心すら知らない上総に、美里は水無月の夕暮れ時、とある言葉を告げる、戸惑いの一週間が始まった……。

朝の小雨は給食時間までにやんだ。水たまりにはさっぱりした青空が映っていた。窓ガラスに滴っていた水滴が乾き、白っぽく跡を残している。

一年生から預かってきた書類に目を通し、上総は軽く机の上でまとめた。先週行われた『一年学年集会』の報告書類だった。

「立村くん、どうなるかと思ってひやひやしてたでしょ」

窓を両手で押し開けながら、清坂美里が上総に声をかけた。

「一年生の評議委員は、みな上総に仕事を押し付けて帰ってしまった。自分でそうさせるように仕組んだようなものだつた。最後は一人で帰りたかった。なのに、同じ一年D組の女子評議委員である清坂が最後まで残つてくれたのはありがたい反面、落ち着かないものがあった。

「そうだな、最後は杉本がうまくまとめてくれたからよかつたけどさ。今年の一年生は難しつて本条先輩も話していたし」

「なんであんなに一年生つて男子と女子、仲が悪いんだろうね。信じられない」

「俺たちの代まで、異常なほど仲良すぎただけかもしけな

い

美里の言つ通りだった。

その年入学してきた連中はなにかかしらあると、評議委員同士いがみ合つていた。

上総からすれば、どうしてそこで譲つてやらないので、どうして親切にしてやれないのがが不思議でならなかつた。

プリントを預かつて、朝の会で発表する時すらも、お互

いに仕事を押し付けあうのはよくあること。

男子と女子が露骨に分裂するだけならまだしも、一人の

女子評議委員に面倒な仕事を押し付けて、あとは自分らだけやつと帰るとは、言語道断の行為に思えた。

今年の一年学年集会も、ほとんど案を考え実行したのは、その女子評議委員だけだった。

もちろんひとりだけでできるわけもなく、一、三年同士が相談しあい、つまく回るように手はずを整えたものだった。

「杉本さんがよくやつたよね。クイズ大会の問題とか、資料とか、手回しどと、一年生から人材集めなくちゃいけなかつたでしょ。立村くんも大変だったと思うんだよね」

「もう少し今年の一年がな、自分から動いてくれたら。杉本

ひとりに負担がかかるずきてるよ」

「でもね、正直なところこうと、杉本さんももう少し、男子とつまく話ができるばいいのにな、とこにはあるよ。女子から見てね。どうしてああ、もう少し柔らかく男子に頼めないのかな。あんたが無能だと言わんばかりのやり方だつたら、みなやりたがらないよ」

上総は同意しながらもう一度、書類をめくつた。

「確かに。もう少し、要領がわかつてればな。あれだけ頭がいいんだから、つまく手回しをしてやれば、もつと楽だつじ。つぐづぐ、俺たちの代つていろんな点で恵まれていたと思う」

「ほんと、いい奴が揃つてよかつたよね。立村くんはひとりでいろいろやつていていたと思ってるだらうけど、私とかも手伝つていたんだからね」

「わかつてる。感謝します」

美里の顔を見ないで、上総はさりげなくささやいた。

夏服の襟もとにさりげなく猫のブローチをつけている。

落ちそなのが、片手で触れている。肩に届いたおかっぱ髪を揺らす。

「本当に、感謝してくれてるのかなあ

「信じられなかつたか?」

「だつて、立村くんいつもひとりでなんでも背負い込んでしまつからね。クラスの行事とか、去年の学校祭とか、冬休みの『忠臣蔵』演劇ビデオ作りとか。本当は言いたいこと、いっぱいあつたんだらうなあ、とは思つていただけど私もどうしていいかわからなかつたんだよ。前から言つてているけど、もし何か手伝つて欲しいんだつたら、ちやんと言つてよね。今の一 年と違つて、うちらの代の評議委員は、いい奴ばっかりなんだから」

「いつもすみません」

丁寧語で答えた。

「本条先輩には来週の木曜までに提出すればいいと言われてこるから、あとでまとめたものを見せるよ。一年評議同士は味方につけたいから」

「数字使うところとかない? 計算とか」

計算や数学が苦手な上総の弱いところをついてきた。

「あとで、検算もお願いします。清坂氏」

窓を閉めながら、美里はピースサインを送つてきた。

「まかせておきなさいつて」

初夏とはいえ、梅雨のない青澗の気候のせいいか、蒸し暑さは感じなかつた。雨が上がればあとは、風がちょうど良いやわらかさで吹き抜け、しゃらしゃらと揺れる葉音が聞こえていた。

ほとんどの男子は半そでのワイシャツで通つている中、上総は布帛の、薄いジャケットを羽織つて通つていた。

ブレザーでは暑苦しい。かと云つて腕を出していくとすぐによ身体が冷えて具合悪くなつてしまつ。

ことに学校の中ではクーラーが完全整備されているので、気温差が激しかつた。

「立村くん、いつも思つんだけど、その格好、暑くない?」

美里は、羽織りものを着ていてる上総をいぶかしげに見ながら尋ねた。前から上総の着てくる服について、妙に関心を抱いて

いる様子だった。

「これだけ洋服についてのショックが厳しいのは女子でもめずらしい。

「自転車に乗っていたら風がぶつかってきて、すぐ冷えるから、ちょうどいいんだ」

「そうか、立村くん、時間かかるんだよね」

「本当に時間がかかるんだ」

帰る準備が整い、窓を閉め、上総は美里と一緒に教室を出ようとした。

次の日の、音楽試験について思い出した。

「あのさ、清坂氏、明日の一時間目、確かにコーダーの試験だったって言つていなかつたか」

美里は立ち止まり、しばらく天井を見上げ人差し指でアゴをつついた。

「そういえば……言つてた言つてた」

「五人で、合奏するって聞いたような記憶があるんだけどさ、全くやつてないよな」

アルト、テノール、ソプラノ、バスの四パートに分かれ、バロック形式の小曲を演奏する予定だった。今回は演奏とペーパーテストの比率が七対三という比率で評価されるということなのでクラスの連中も結構真剣に練習しているようだった。

「私もやつてない」

「それで、リコーダー、貸してもらえたって聞いたんで、昨日音楽の先生から借りてきたんだ。ただ」

「ただ、どうしたの」

上総はこめかみを指で抑えながらつぶやいた。

「たぶん、D組の教室に忘れてきている」

総毛立つて細かなチェックを行い、できるかぎりミスしないように心がけている上総もたまにこうやって抜けたところが出

てきてしまい、いつも落ち込むことが多かった。几帳面に身ぎれいに、過ごしているつもりだけれども本当のところは、こんなもんだと、自分でもわかつっていた。

美里がそういう上総の性格を見抜いているのかどうかはわからなかつた。

「じゃあ戻るうよ。今氣付いてよかつたじやない。確か、立村くんのパートってテノールリコーダーだったよね」

「一人しかいないから間違つたら絶対、目立つし」

「氣持ちはわかるな。私、アルトリコーダー一人組でよかつた!」

氣を遣つてくれているのだろうか。

一年前、入学式で羽飛貴史から『俺と同じ小学校の幼なじみ』という紹介で知り合つた。たまたま座つた前の席に貴史がいて、美里が声を掛けてきた。なりゆきもあって、学生食堂に行き、昼(ひ)はんを食べたのがきっかけだつた。

やはりなりゆきで上総と美里はD組の評議委員に選出され、お互に話す時間も長くなつた。

授業中、委員会中、時には別の場所。

女子とそれほどおしゃべりする方ではない上総でも、美里には気兼ねなく『清坂氏』と呼びかけることができた。入学後一時期はやつた、『女子を氏つきで呼ぶ』という遊びが廃れた後も、なんとなく上総は、美里にだけそう呼びかけることにしていた。意味はない。呼びやすいだけだ。

毎朝しゃべつたりと太ネタを話したりする『仲良し』に近いのだろう。

現在の一年生が異様に男女の差を意識しているのに比べ、上総たちの代はみな、仲のいい奴はいい奴、悪い奴は悪い奴と割り切つてているような感じがしていた。

相性の合う人合わない人がいる程度で、男女だからとい

う意識はほとんどしていなかった。

貴史が言つこは、

「あいつが男だつたらすべて丸くおさまつたんだろうけどな」

美里が言つこは、

「あいつとしゃべっているのはおもしろいよ」

まさか中心グループの人気者たちと親友づきあこせてもらえるとは思わなかつた。

できるだけみんなにあわせてこよひ、浮かないようじょひ、そう気を遣いつづけた一年間。

『気が付けば上総は、一年に上がつてから無条件で、評議委員に選ばれていた。

「やつぱり、D組の仕切りは立村しかいないだろ」と、ほとんどの男子がうなづいてくれた。

一年以上経ち、クラスではいやなこともそれなりにあつた。

傷ついたこともたくさんあつた。

もう、これで自分はおしまいだと泣きそつになつたことも何度もあつた。

そんな自分が、はずされることもなく一年連続評議委員に納まつていられるのは、おそらくこの一人のおかげだらう。

清坂美里には、心から感謝している。

言葉に嘘はなかつた。

D組の教室に戻り、すぐに上総は机の中を確認した。

たいてい、使わない教科書などは置きっぱなしにして帰るものだつた。音楽、保健体育、技術家庭、道徳などがそれに当たつた。

見つかると先生たちからは厳しく叱られる。

される。

お説教付きで一発ひっぱたかれた後、教科書をかばんにしつこまれるのはやがてだつた。

そんなことを言つてもかばんに入りきらないんだから、しかたないだろ。

二年D組内における、多くの主張だつた。

幸い上総は、評議委員会の先輩達から隠しておくテクニックを教えてもらつていた。呼び出しをくらつたことはなかつた。なんのことはない。手提げを用意して、運動靴入れのロッカーにいれておけばいい。目立たない形にしておけばいい。委員会が終わつてからこつそり置いてくればいい。自転車で三十分近くもかかる品山の家まで、重たい荷物を持つのはごめんだつた。

「立村くん、見つかった?」

「じこいつたんだらう、変だな」

口では抑揚の無い返事をしているつもりだが、真剣にあせつていた。

ちゃんと借りてきたはずなのに。

まさか今度はなくしてしまつたなんていわないだらうな。机の中に確かにしまつたはずなんだが。

「別のところに置いたんじゃないの?」

「かもしれない」

手提げバックの中に入れた記憶はなかつた。

さらにじうなら借りものを靴の匂いがつきそうなロッカーに入れるような非常識なこともしていないつもりだつた。

「教室出るまではあつたのね」

「そうだと、思つ」

「掃除の時に落としたとしても、拾つからわかるよね

「うん、でもそれしか考えられないな」

机の出し入れをした際に、転がり落ちたか、その可能性しか思いつかなかつた。かなりますい。明日、なんでなくしたのかとか言われて怒られそうだ。頭を抱えたいのが本心。

でも美里がいる以上みつともないといふは見せたくない。

「ね、立村くん、念のためロッカーも見てみなよ。もしかしたらつてことあるかもよ。立村くんの机に入れておくと、また落ちてしまつてだれかが思つたかもよ」

「あることを切に祈る」

たかが音楽、と馬鹿にすることなけれ。なにせ青大附属においては、合唱コンクールの最優秀賞受賞クラスに『一泊二日クラブ旅行』を賞品に用意するくらい、力の入った行事だつた。そこまでいかなくとも歌のテストがある時は、一種異様なカラオケ大会と化するありさまだつた。

企画は得意だが自ら演ずるのが苦手な上総としては、でできるだけ避けたい行事のひとつでもあつた。

ロッカーには鍵がついていなかつた。

盗難防止に、というよりも、鍵をつけたら絶対に誰かがかぎを無くすのが目に見えているからだらう。

しかも、四人共同のものだ。

五十音順だから、「り」行の上総は「は」行の貴史と一緒にだつた。

すでに「ちや」、「ぢや」といろいろなものが混じつていた。

互いのものがわかりやすくなるよつに、大抵は手提げかビニール袋に覆われていた。

漫画面本と、休み時間に使うボール一式。

バレー、ボールが入つてゐる時もある。

上総が置いてゐるのは、体育用の上履きと、習字のセツト一式、あとはリコードカード。几帳面にまとめて棚に並べて置

いていた。

まさかこの中にあるとは思えない。  
美里の勧めに従い、袋を開けてみた。

「あのさ、清坂氏、聞いていいか」

「なあに?」

「ロッカーの中にあるって、どうしてそう思つた?」

「だつて、立村くんは机の中に入れておいたんでしょ。で、そこになかったんでしょ。ということは、落ちたか拾われたか盗まれたかのどちらかでしょ」

「盗まれた、か」

「でも、学校のものを盗んでなんになるって気もするのよね。最後の可能性として取つておくとしても、拾つたらどうするか。立村くんの机だつてことはわかるだろうし、明日リコーダーの試験だつてこと、思い出すだらうから。しかも立村くんつてば、テノーリリコーダーじゃない。各グループ六人しかいなくつて、今必要だつてことを考えたら、立村くんに行き着くのは時間の問題だと思うな。私だったら、さつさとロッカーに入れておいて、知らん振りするけどね。ほら、また机の中に入れておいたらころころ転がつてしまふかもしれないじゃない」

「お見事」

上総は、ケースの中に入つているリコーダーを掲げるようにして持ち、美里の方を向いた。

「しつこじようだけど、今日は本当に感謝します」

今度こそこそないようかばんに押し込み、外を眺めた。

一年に進級してから、委員同士で班を組ませるやり方は行わなくなつた。いつも同じ顔をつき合わせていたくないという、一部の委員から意見が出たためだつた。持ち上がりの担任である葵

本先生もあつさりその要求を飲み、学期の初め班編成を行うことになつた。誰もが納得する方法として、くじ引きが採用された。評議委員には『班変えのくじ引き作り』という新しい仕事がまた増えた。

その結果、一学期中、上総は美里と貴史と別班にまわされることとなつた。まあ、去年はずつと一緒にたたし、クラスそのものは一緒にだから、取り分けて淋しいということはない。班で一緒になつた連中とも、それなりに仲良く付き合つてゐる。

現在の班には、古川一貴えがいる。隣の席だ。

本音を言つてこちらの方が上総にとつては悩みの種だつた。

仲が悪いといつのではない。

それどころか、女子の中では話の合ひ、いい友達だと思つてゐる。

しかし、毎朝『弟にしているような』際どい質問を投げかけるのはやめて欲しかつた。

いきなり『あんた童貞?』と脈絡も無く投げかけられると、こちらはどう反應していいかわからない。おそらく日々、姉からの攻撃に耐えているであろう一貴えの弟に上総はいつも同情していた。

話を聞いている限り、感覚がかなり自分と似た小学校六年生らしい。

少しだけ雲の色が重さを増していった。もくもくと聳え立つ雲が見えるようならば、必ず折りたたみ傘を持っていかなくてはいけない。

ロッカーには万が一のためにかさも入れてあつた。ついでに持ち出すと、美里が田ざとく見つけてきよとんと尋ねた。

「いんないい天氣なのに、雨降ると思つ?」

「なんだか危ないよ。この雲はまずい。清坂氏の家までなら平気かもしれないけれど、俺の家になるとかなり遠いから、空が持つかどうかわからない」

「どうせ、上総の住んでいる品山の方は天気が変わりやすいのだ。」

一階の教室から眺める山々は、うすら水色に浮かんでいた。かすかに雲が輝きを抑え、まだらに空氣をすかしていた。山の色といえば、遠めで見る限り、水色だ。今にも消えそうな、はない薄さだった。窓を閉める前に上総は、誰か校庭にいるのかどうかを確認した。

誰もいなかつた。

遠くのグラウンドでかすかに、吹奏楽部の練習がもれ聞こえる程度だった。

「羽飛はいないみたいだな、もう帰ったか」

「委員会もやらないんだつたら、もつ少し部活をまじめにやればいいのにね。あいつ馬鹿ね。そうそう知ってる？ 貴史ね、一年生の女子から昨日、告白されちゃつたらしいのよ。こずえが騒いでた」

あんなに上総に対してはしょもないネタをかますくせに、肝心の羽飛貴史に対しても積極的になれない古川こずえ。あきれてしまふ。

「古川さんももつ少し、自分の心に素直になれって言いたくなるな」

「こずえは自分なりに素直でいるんじゃないの。まあ、私も知っている子だつたけれど、どうかなあ、なにせ貴史の好みは『鈴蘭優』だから」

「羽飛のおかげでやつと覚えた」

芸能人やアイドルについてどうしようもなく疎く、一年のうちはちんぶんかんぶんだった。話をあわせるのに苦労したものだった。

最近になつてようやく少しづつわかるよつになつたものの顔を覚えるのがやつとだつた。

「立村くん、貴史からは聞いてないの？」

「全然。男子同士ではあまり、そういう話、しないんだ」心ならずも嘘をついてしまつた。男子同士が集まる時、全くしないどころか、ほとんどの場合、ひそひそ声の話題になつてしまつことが多い。

女子の前では絶対にいえない内容である。さすがにクラスの女子について批評するなんてことは、めつたにしない。

その代わり、『鈴蘭優』などのアイドルをネタにして、胸の大きさやセクシーショット、どうこうしたことやそられるか、などを真剣に語り合つて最後に自分の抱えていたことに行き着くといふ、良くあるパターンだつた。

男子に幻想を持つてはいけない。幻滅の道まつしぐらだ。口に出す氣もない言葉を、心の中にしまじこんでおいた。

「ふうん、そうなんだ。立村くんはあまりアイドルのタイプがどうとか言わないよね」

「わからないからな。この前も古川さんとプロマイド、また、見せられたよ。適当に選んでおいたけれど、最近の芸能人って顔が同じに見えるんだ」

「はは、それってわかるな」

「どうして羽飛は、テレビドラマなんかどちらつとしか出てこない鈴蘭優を、瞬時に発見できるのか、俺には理解できないよ。テレビを一緒に見ていると、とにかくおどろくよな」

「そうそう、貴史って、好きなものにはとにかく、チェックが早いよね！」

しばらく美里と羽飛貴史のことで盛り上がつていた。共通の友達だからとこいつもあるだらう。

本当だつたら、夕立が降る前に帰りたかった。

美里の巧みな話術に乗せられたのが真相だつた。

話を

聞いているだけでなく自分からも話題を出してしまえること。 小

学校時代の上総を知つている人が見たら、きっと驚くだろう。 大

抵の場合は様子をうかがつて黙つていることが多かつた。

「ふうん、アイドルとかでも好きなタイプつていないんだ

「顔を見ればわかるだろうけれど、そうだな。いない」

「でもそれつて、淋しいよね。別に結城先輩くらい熱中しろとは言わないけれど」

「あの人はずご過ぎるよ。この前本条先輩と高校に用事があつて会つたけれど、前の日に例のアイドルグループコンサートに行くため、授業さぼつたという話をしていた」

結城先輩とは、二学年上の評議委員長だった。

上総が入学した年の委員長で、熱狂的アイドルマニア、かつ女性アイドルグループの追っかけに情熱を燃やしていた。今でもその傾向は残つてゐるらしい。何度か上総も、結城先輩の家に遊びに行つたが、部屋にはポスターが天井から床まで大量に敷き詰められていた。同じ部屋を見るなり、「あの部屋で生活するなんて、俺だつたら気が狂う」

と言い放つたのは、現評議委員長の本条先輩である。

「そ、うなんだ。結城先輩くらいマニアックになるとちょっと怖いかもね。彼女作れよ可愛そうにって、女子の間ではさんざん言つてたよ。いないよね、そういう人」

「歴代評議委員長はみな、一癖ある人が多いよな。本条先輩の狂い方も少々怖いところがあるにしても」

本条先輩の女性遍歴は相当なものだつた。

上総も何度か話を聞いたことがある。教えてもらつたこともある。たぶんほとんど事実なのだろう。

真似はできない。一日で一人の女子とデートするなん

て器用なことできそうにない。

「なんで本条先輩、ああこう」としたがるんだろ？な。黙つてもいいからでも、付き合えたるだろ？」「元気なね

「本条先輩と付き合ったがつてこの三年の先輩、きっとこ

るだろ？ね

「よくわからないな

上総はつぶやいた。

「付き合つてこと自体、よくわからない。無理しなくてつていいのにな」

「なぜなぜ？」

「気の合つ友達がいればそれで十分だろ？って思つんだけどな」

「ふうん、そななんだ。立村くんはそういう感じなんだ。あのね、立村くん、今私たち、噂されてるつて知つてた？」

「私たちって……か？」

指で自分と美里を交互に指した。

「うん、最近、しょっちゅうなんだけど、立村くんの方はどう？」

「確かによく言われるよ。でも、慣れているけれど」「そうなんだ。で、そう聞かれた時つて、どう答えてるの？」

「いや……嫌いじゃないって、そのくらいかな？」

「そななんだ」

ひょこと立ち上がり美里は窓辺を向いたまま上総に背を向けた。

一呼吸置いてから、くるつと振り向き、

「私も、立村くんみたいなタイプ、好みよ。付きあつちやおつか」

上総は自分がどういつ顔して答えたのか自信がなかつた。じくじくと心臓が鳴り響きはじめた。心臓の音が聞こえ

るのだけは、はっきりとつたわった。なんでもこんなにひねれこのかわからなかつた。

自分の身体がどう反應しているのかすら自分で押さえられなくて、いらだつた。

机の上に片手を置き、やわらかい表情を必死に保つたまま、短く答えるのが精一杯だった。

「いいよ、清坂氏とだったら」

きっと美里には見破られていないだろつ、そう願いなが

5。

音楽の試験は、グループごとに練習を行った後、一曲ずつ合奏し、即座に音楽教師が採点を下すという方式だった。

上総の入っていた班は演奏するのが一番最初だった。ちなみに美里は一番目、貴史は三番目だった。男女混合六グループに分かれている。

「じゃあ、音楽委員と評議委員、悪いけれど準備室からリコーダーを持ってきてもらえますか」

二十四人分のリコーダーを運ぶべく上総は美里と顔を見合わせ、席を立った。アルトリコーダーは自分で購入する決まりだが、ソプラノ、テノール、バスは学校すでに用意されているものを使う。練習の前には水道できちんと吹口を洗うのが約束だった。

つばを抜くために、終了間際には鳥の悲鳴に近い音を出す。

四人も人手はいらないさそうだった。すでに音楽委員はリコーダーを運び終わり、評議委員の手伝うことはないように見えた。

「もう、運ぶものってないよね」

美里が音楽委員に尋ねた。

「あるよ。音を録音するための、カセットトレコーダー。一日必要だつて。あとさ、テープだよ。全員のを録音して、後で全員分まとめて配ってくれるんだってさ。三十本持ってきてって言っていたよ」リコーダーの重さでふらつきながら音楽委員は出て行つた。

上総はまず、ラジカセらしきものがどこにあるかを探すことについた。

薄暗い中、ほとんど掃除もしていないとみえて綿ぼこりが舞い上がり、思わず咳き込んだ。楽器が狂つておかしくなるんでないだろうか、と思つくらい湿気のひどい部屋だった。

上を見上げ、棚をしらべ、アコーディオンやシンバルの陰に隠れ

ていなか、美里とふたりで丁寧に調べた。

「探し物が得意な清坂氏ならば、だいたい嗅覚で気付くんじゃないか」

「犬じやないんだから」

ばたばたと棚をいじつていた。扉をきつちりと閉めてくれたので、どのくらい時間が立つてするのがわからなかつた。

上総はようやく見つけたカセットレコーダーを引っ張り出し、ハンカチで埃を拭いた。

「使つてないよな、この状態つて。持つていく方の身にもなつてみろよ」

「服汚れるの、気にしてるの？」

「まさか、ただ、こういう埃つぼいといひに長いと、咽がおかしくなつてしまふんだよな」

手を動かし続けていた。絶対に田をあわさずに話し続けていた。背中で美里が動き回つているようすが感じ取ることができた。たぶん、テープ三十本を探しているのだろう。想像はしていた。

「あのね、立村くん」

「テープはここにないよ。もう一方の棚じゃないか」

「つうん、みつかつた。私の嗅覚で発見すみ」

振り向くと、美里が真後ろで新品のカセットテープを籠にまとめ立つていた。表情は相変わらず、いたずらつぽそつう瞳が田立つていた。

「さすがだよな。昨日といひ今日といひ」

昨日、と口にしたとたん、美里と見詰め合つてしまいすぐにそらしたくなつたのをこらえた。

いくらなんでも目を合わせないでいるつていうのは失礼だ、

「立村くん、あの、いいかな。ちょっと相談なんだけど」

「え？」

瞬間、雲がかかつたように見えたのは気のせいだろう。

「昨日のことなんだけど、あのあと、誰かに話した？」

「あ、あのことか」

すぐに反応してしまった自分が情けなかつた。上総は表情を崩さぬよう言葉少なめに答えた。

「いいや、話してないよ」

「そりなんだ、話すようなことじやないよね」

「悪いこと、するわけじやないからさ」

「そうよね、悪いことなんて、してないよね。私たち」

私たち、という美里の言葉に、再び上総は戸惑つた。

「それだつたら私も、言わないでいるから。別に隠すことじやないけれど、立村くんもあまりそういうこと言いたくないタイプかな、と思って」

「別に、俺はかまわないよ。あまり気にしないから」

「でも、話してないんじよ。貴史にも誰にも。私にちょっとかいだしてこなかつたところみると、たぶん立村くん、内緒にしてくれたんだろうなあつて、思つていたんだ」

「ひとりで決められる」とじやないからな。清坂氏は、どうすればいい

他人に下駄をあずける自分の優柔不斷な性格。

つい上総はためらつた。

まるで、自分で物事を決められない奴みたいじやないか。どう振舞うべきか判断ができなかつた。

「そうね……私だつたら、しばらくは内緒にしておいてもいいな」

「それで、いいならそうするよ。わかつた」

上総はしつかり目を見つめて、うなづいた。少しだけ安堵のため息がもれたのを、美里に気付かれないようにしたくて、ふたたび棚の方を向いた。

「じゃあ、教室に行こうか

「うん、一緒に行こうね」

いつもだつたら、荷物の少ない方がさつさと教室に向かつ。この日は美里が上総を待つてくれていた。一緒に音楽室へ戻ること

になるのは、めったにないことだつた。なんとなく自然に思えて

上総も従つた。

「教室に入る時、悪いけど扉を開けてもらえるか」

「もちろん、そうさせていただきます。私もラジカセ、半分持つ  
か」

「いいよ、なんだか、みな清坂氏に任せつけなしのようで抵抗ある  
から」

少しゆつくりめに歩いていたのは氣のせいだらう。

重たいラジカセを両手にぶら下げているゆえに走ることもできなかつた。

美里はテープのたばをか」に入れて歩いている。  
上総の田をしつかと見て、楽しそうに笑つていた。

音楽室ではすでに、全員がリコーダーの練習にいそしんでいた。  
やかましい笛の音に耳をふさぎたくなつた。

まだ準備ができるいないこともあって、音楽教師も暇を持て余して  
いるようだつた。上総はラジカセ一台をグランピアノの蓋に置  
いた。美里はかごのテープレコーダーを全員に配つていた。

「ありがとう。それにしてもずいぶん遅かつたなあ。評議委員コン  
ビ」

にやりと田線を向けてきた。

「早く呼びたかつたら、音楽準備室の棚をなんとかしてくださいー。  
わかりずらいつたらなかつたよね、立村くん」

口は達者な美里が、さらりと言い返した。

言いたいことをきつぱり言つのに、なぜかいやみにならなーし、  
先生も笑つて聞いている。

どうしてだらうと、上総はうらやましく思つていた。自分が発言  
すると、なぜか教師一同はまじめな顔をしてうなづいたり、叱つたりする。特に担任の菱本先生は、上総に対しきつてい言葉を向けることが多い。たぶん嫌われているんだろう。

美里が言つには、

「単に立村くんのことを『氣にしてくれてるだけじゃないの?変な意味じやないくて、ひこもれてるんだよ』」

とのことだが。

わざと自分の席についた。あれだけ騒いだのに結局一回くらいいしか稽古できなかつたテノールリコーダーを組み立てた。借りてきたリコーダーは、つなぎ用が堅くてはめるだけでもかなり苦労する。

継ぎ用を握り締め、うまく差し込むべく悪戦苦闘していると、バスリ「コーダーパートの南雲が寄つてきた。耳もとにささやいた。「相変わらずだなあ、立村は。一体準備室で何してたんだよ」「ラジカセを探していたんだよ。探すの大変だつたんだ」「違う違う、清坂さんとふたりつきりだつたんだ」「ぴんとこなかつた。

「ひとりで全部持つてくる根性なかつたからな」「全く、とぼけちゃつてるんだからなあ。立村は何氣なく、『うまいよな』

「だから何が

「ポーカーフェイスですることしてるしな」

音楽準備室で長居しすぎたのがまずかったのだろう。ようやく気付いた。自分の鈍さにあきれた。きっとみな、想像をたくましくしているのだろう。最近のD組連中は、恋愛沙汰の話題にずいぶん敏感だ。一年の頃だつたら全く気にしなかつたようなことをチエックする。

もつとも南雲はさんざんな用にあつた奴である。

見かけはきぞっぽく見える。そんな南雲には以前、別のクラスに彼女がいた。とりわけ美少女というわけでもないが、並んで違和感のない感じの子だった。

しかしいきなり心境の変化があつたらしくその女子と別れ、なぜかクラスの奈良岡彰子に告白してしまった。

奈良岡彰子が前の彼女以上にきれいな子だつたら誰も驚かなかつただろう。確かに飾らない、性格としても気持いい女子だつた。

だが、体型がぽつちやり、を越えてかなりのビール腹タイプだつた。面食いの男子だつたら、一歩ひいてしまうタイプだろう。

しかし、本気で奈良岡に惚れた南雲は、理科実験室でアルコールランプを取りに行つた際に告白してしまった。

かわいそうにタイミングが悪すぎた。同じD組の男子がその衝撃的な場面を目撃したのがまずかった。

話によると相当、恥ずかしくなるような言葉を吐いていたと聞く。一人が戻つてくるまでの間に情報は流れ流れてD組始まって以来の大騒ぎと相成つた。『理科実験室告白事件』として、当時の学級日誌にはひつそりと書き残されている。

「南雲、お前と一緒にするなよ。人は人、自分は自分だろ」そのことに触れられると、南雲も力抜いたような顔で、情けなさそうに笑つた。

ばれた当時は開き直つて堂々と

「そうだ、俺は奈良岡のことが好きだ！」

と言つてのけ、奈良岡をすっかり困らせてしまつた。そういう対象にされていること自体、奈良岡も想像していなかつたようだつた。

もつとも、単なる受け狙いではなく本気だつたということが、一年D組男子の協力もあつて奈良岡に通じ、今では公認のカッフルとして和やかに過ごしている。

「まあ、立村、先輩として言つておくけどな」

バスリコーダーを加えながら南雲はささやいた。

「学校の中でしぐじるのだけは、絶対、やめとけよ

「了解」

それ以上は無視して、上総はふたたびリコーダーと格闘しはじめた。

たぶん美里が話していた『最近噂される』ところのは、南雲のいうような類のことなのだろう。

「ハハハ、ことだつたら、上総も覚えがある。

一年の頃は貴史に散々からかわれ、どうぞ返せばよいのかわからなかつた。

「絶対、美里はお前のこと意識してゐるよな」

「お前はどうなんだよ」

「ま、悪い奴じゃないからや」

「でも将来は怖いぞ。お前の性格だと尻に敷かれるな」

無表情のまま話を聞くことが多かつたのもあつて、上総はただ、羽飛、なぜ、そういう話題を俺に振る?

と、尋ね返した。それが他の連中からは

「ポーカーフェイスを氣取つていい」

と言われることもあつた。

「あまり女子のことを考えたことないから、よくわからない」

「普通に話していればいいのにな」

上総からすれば、自然な感覚で答えているつもりだつた。

でも貴史はどうも言葉どおり受け止めてくれない様子だつた。疲れることもしばしばだつた。

「好きだつたらお前から言つちゃえればいいのにな」

「俺からみたら、ばればれなのにな」

貴史の態度は親切の押し売りに思えるときも、しばしばあつた。美里とくつつけようとする懸命な態度が、なんとなく不自然に感じられた。

きつと上総のことを大切な友達だと思つてくれるからだらう。それは純粹にありがたい。

でも、こちらの考えていなことを先回りして準備する必要はないんじゃないか。羽飛。

『付き合いつ』といつ言葉が飛び交い始めたのは、一年に上がつてからだらう。

それまでは誰も、言葉に出さずアイドル歌手やタレントの話題で盛り上がつていた。自分の好きな女子が誰かを口にするなんて、考えたこともなかつた。

アイドル歌手を隠れ蓑にして、似ているクラスメートのことを語りうとする大馬鹿者もいたが、一発で見破られ、からかわれるはめになつたのはいうまでもない。

上総も芸能界の情報には疎いこともあつて、ただ話をあわせているだけだつた。

だが一年に進級した頃から、それぞれが、自分の『お気に入り』を心のどこかに隠していることがうつすらと見えてきた。よそ見していくても平気な英語の授業中、上総は気になる奴らの様子を、後ろの席からいろいろと観察してみたものだつた。

授業中、先生の顔を無視して他の女子を、背中が突き抜けそうなほど見つめている奴がいる。かと思えば、手紙を書いて後ろへ送っている女子もいる。授業の最初の号令をかけていると、先生に頭を下げている間にじつと見つめている背中とか。

つい気を取られて、よく

「立村、暇なのはわかるがよそ見するな」と叱られたものだつた。

叱る方が別だらうに、と思いつつも、上総は何も言わず語らはずのままでいた。

南雲の状況も早い段階でだいたい勘付いていた。

もともと奈良岡と仲が良かつたのは確かだし、噂で前の彼女に『好きな子が出来た』といつ理由で別れたとも、直接聞いていた。なにせ同じ班だ。

だがその『好きな子』が奈良岡だとはなかなか決め付けられずにいた。

どちらかいいと、羽飛貴史と清坂美里のよう、親友のよつな感じなんじやないだろうか。

上総としてはそう判断していた。第三者から見ても、顔が女子受けする南雲と、愛嬌はあるものの美人とはお世辞にも言えない奈良岡とは、見た田どうもつりあいが取れていないふうに見えた。

当然理科実験室での告白事件ではどぎもをぬかれた。と同時に南雲を改めて見直した。

その後起こつたクラス中の冷やかしムードも、結局は奈良岡を混乱させないためにとこりことをメインに、南雲の心境を正確に伝えるべく行動し、無事収まった。

たかがクラスの色恋沙汰という無かれ。

表だつては言えないが、これも評議委員の『影』の仕事である。

青鴻大学附属の校訓。

「誇り高い紳士であれ、淑女であれ」

D組の男子に関してのみ言えば、この意識はかなり浸透している、上総は確信していた。

クラス内のカップルは増えては減りと増殖していった。

結果の出た連中については、大体様子を見ていればわかるし楽しめるところもある。観察者としてはおもしろい。

しかしつたいどこでどう手続きをしているのか見当がつかなかつた。南雲のよつなわかりやすい告白を、どこでみなしているのだろう。教室か、もしくは部室か、委員会の帰りなのか。気が付けばいつのまにか、お付き合いらしい顔をしてたむろつている連中が増えていた。

なにをすれば、付き合つたといつことになるのだろう?

玄関で待ち合わせしている男女一人組がいれば、たぶんそれも付き合つてているのだろう。

ロビーで手をつないでいちゃいちゃしているのも、付き合ってい るのだけれど。

本条先輩のようごうどうどうと汨り込み、する」としているのも、付き合いのひとつなのだらう。

付き合ひ、という言葉でふくらむものが多くて、昨日までは自分とは関係ない世界だと割り切っていたし、想像したことなどなかった。

「立村、お前には清坂がいるんだろ」

と真顔で切り返された」ともある。判断できないパターンは多々あつた。

嬉しいしゃないけれどそれとこれとは別だな」「  
と、流すのが常だった。

ひめうひめう言われるのはいやだつた。  
う言葉が気持悪かつた。主義に合わなかつた。  
上総の目に、『付き合つてゐる』友達は誰も美しく見えなかつた。

しかしながら、昨日の段階で、『付き合ひちゃおつか』という美里の言葉を受け入れてしまつた自分が、今、ここにいる。

リコーダーを吹きながら、座っている。

ちらりと美里のいるグループを探してみた。相変わらずはしゃぎ声がやかましい。貴史が美里になにやらリコーダーを振り上げて威嚇している。

付き合っている、ことになるんだよな。

『付き合つ』といつ言葉をかみ締めていた。

自分の知らない響きのような気がした。

テストは無事終了し、使い終わったリコードを一十四本運び終えた。

音楽委員がほとんど片付けてくれたので、評議委員コンビの出番はない。ラジカセのみ、運んでいった上総に対しても音楽委員はむりつと、

「相変わらずだなあ。一人ともな」と言葉をかけ、去つていった。

「一人? なにが」

戻りながら上総は戸惑つていた。

「いつたい、何が相変わらずなんだか」隣にいた貴史につぶやくと、

「お前まだ気付いていないのかよ」呆れ顔で頭を抱えられた。

「だつてな、お前ら道具取りに行くのに、十分以上かけて戻つてくるなよな。音楽委員は先に帰つてきました、でも評議委員はふたりとも戻つてきません。なんででしょうかって、そりや思つぞ」「音楽準備室の棚を整理しない先生に文句を言つてくれよ」

「せめてひとりで持つてくるとかや、しろよな」

「ラジカセ一台で両手がふさがつているつていうのに、テープの入つたか」をびつやつて一人で持つて来つて言つんだ。頭の上に載せるとでも言つのか

ああいえば二つ言つて返すで貴史もうんざつしたのだらう。わざとらしくため息をつき、じろりとにらんだ。

「悪いけどさあ、立村。お前、『自業自得』つて四字熟語知つているよな。覚悟しろよ。これから先」「何を覚悟するつてや」

答えずに貴史は音楽室を出ていった。わざと行きはしないで、追いつつとする上総を扉の前で待つてくれた。

大抵の日は、家で洗濯物を片付けたり、何も考えずに寝ていたりと、外に出ることもなくおとなしくしている。

決して、次の日の予習をしたりとか、友達を呼んだりとか、そういうことはしない。

もちろんクラスの何人かは遊びにきてくれたりするし、駅前に出て遊んだりすることもあるけれども、なにせ品山の人間ゆえ、どこにいくにも遠い。かといって、近くで遊ぶのだけは避けたかった。

小学校時代の知り合いと顔を合わせるのはいやだった。約束のない日曜日、上総はいつも部屋の中で過ごしていた。

「上総、起きているか」

ドアの向こうから父の声がする。

日曜日なのに、めずらしく家にいるのはなぜだろう。

上総の記憶には、祝日遊びに連れて行ってもらつたことがほとんど残っていない。

全くなかつたわけではなさそうだった。かなり古い写真には、つまらなさそうな顔をして映つてゐる遊園地でのスナップが残つてゐる。楽しいと思ったことがないから、たぶん両親も好んで連れて行つたわけではないのだろう。

「起きてるけど

「今日はどこも行かないのか

「行かない」

短く答え、上総は父親が部屋に入つてくるのを迎えた。

机に向かつていれば何をしていても、まず勉強だと思つてくれるだろう。

教科書を開いていれば、カモフラージュも問題なし。

周りから『うつーつ』と言われるくらい、父と自分とは似ているらしい。

上総自身はそう考えたことがないのだが、母からもしごきひとつに、

『上総はお父さんそつくりだから』  
と言われつづけてきた。

どこが似ているのだろう。細い唇とか、痩せ型のからだつきとか、首の長ことこうとか、ありとあらゆるところが重なるのだそうだ。

「お前、身体の調子は大丈夫なのか」  
「問題ないと思つ」

父が上総に話しつける最初はいつも、体調の是非だった。だんだん夏气温に近づく頃、大抵上総は高熱を出して一週間くらい寝込む。本当に小さい頃からそつだつた。

一年の六月、やはり夏風邪で倒れてしまつたにもかかわらず、父は

「いつものことだ」

とばかりにほつたらかして仕事に出かけてしまった。かえつてそれの方が嬉しい部分もある反面、全快してからの家事を片付けるのに大変な思いをした。

今年はそれに懲り、前もって夏風邪対策を練つてある。薬を準備しておき、ちょっとふらつときたらすぐにベットに横になる。具合悪いから、の一言でほとんどの言い訳が利く。

ただ、その時はかならず

「頼むから、お母さんには連絡をしないで」と頼まなくてはならない。うつかり、別居している母に連絡を入れられたら、病人といえども心休まる間がない。

上総は数学の宿題をやつているふりをしながら父の方を見た。いかにも

「忙しいのに、一応親だし」

という顔をしてみせた。薄手の灰色開襟シャツをきちんと着ている格好は、まるで学校に行つているかのように見えたのだろう。

「誰か遊びにでもくるのか。学校の友達か誰か」「来ないけれど」

「それならなぜ、もつとラフな格好をしないんだ」

「着たくないから」

ふうん、と上総を眺めた。普段から軽いジャケット風の洋服を好む上総の性格を、我が子ながら今ひとつ、理解できないでいるようだった。

「そういうえば、母さんが来週、一泊二日で泊りにくると電話があった。久しぶりに家の掃除をしてやるから、と電話で話していたよ」

「別にいいの?」

母さんか。

冗談だろ。

また何言われるかわからないよな。

誰かの家に泊りに行こうかな。

「そうだ、この口に関しては、上総、友達の家に泊りに行くのはあきらめろよ」

心を見透かされたようだった。

ため息が漏れ、あわてて顔を机に向かた。

「月に一度のお約束だからな。父さんも休みを取るから、

おあいこだ」

憂鬱一色。

父も母もいる週末、自分もどこにもいけない。

「こんなうつとおしい土日が来週なのかよ。

「だから、母さんに見られてまずいものは、どこかに隠しておきなさい」

「そんなのないけど」

顔を上げずに上総は答えた。

いつ母が来ても問題なじように、掃除洗濯は神経質すぎるくらいの氣を使っているなんて、父には言えない。

きちんと季節の飾り物なども、母の残してくれた『歳時記ノート』を参考に、並べていることも。それこそ抜き打ちテストのようなものだった。

もし、ひとつでも整つていなかつたら、何を言われるかわからない。

成績のことについてはあまりひみたく言われないけれども、生活が荒れ果てていることだけは許されなかつた。

やつぱり今日は、家中、必死で掃除しないとまずいってことだよな。

本当はずつと横になつていたかつたのにな。少し頭がぼおつとしてきているし。

「やうごえば、最近どうしていの？ あの、電話をくれた女の子は」

「別に、なんでもない」

「はきはきした、いい感じの子だな」

家に電話をくれる女子といえば、清坂美里しかいなかつた。

評議委員会のからみもあつて、確かにしょっちゅう連絡が入る。時にはつきあつて長話をすることもあつた。

でも、父が電話を受けたのは数回程度のはずだつた。

上総は父のつっこみを無視することにして、シャープペ

ンシルを走らせた。

いかにも、

「宿題をやっています」

というポーズを見せた。

「たまには外で遊びに行つたりしないのか」

「それどころじゃないから」

「宿題が大変なのか」

「そういうこと」

「数学か」

ようやく父も、上総の成績について気がかりなことを見

つけたらしく、教科書を覗き込んできた。

迷惑だ。

早く部屋から出て行つて欲しい。

そう念じるのだけれど、鈍感な父は気付いてくれなかつ

た。

「じうじう雰囲気が上総はたまらなく苦手だつた。

「どうなんだ、学校では勉強とか辛くないのか」

「数学以外は」

最近の上総は、自分の成績について開き直つていた。成績表を見せて、父は怒るわけでもないし、むしろ文化系科目の良さに驚いている様子だった。たぶん、上総の成績が、両極端なものだというのに戸惑っているのだろう。

一年の時に家庭訪問があり、その際に菱本先生からいろいろ助言されたらしい。

くわしいことは聞いていないし、父も特に後から言わなかつた。

ただ、

「お前は英語科に進んだ方がいいかもな……」

とつぶやかれた程度だった。

青大附高には英語科目カリキュラムが豊富な英語科とい

う、クラスが用意されている。

「あまり無理にとは言わないが、英語以外の科目ももづ少し、勉強した方がいいんじゃないか」

「している。出来ないだけ」

悔しいからそれしか答えなかつた。

一応どこのじやない、ちゃんと他の科目を勉強しているとといひじやないか。

赤点続きだけだ。

数学の勉強してくるつもりだつてさ。

いかにも

「勉強中なので邪魔するな」

というオーラを撒き散らしたので、よつやく父も部屋を立ち去つた。

あまり話す」ともないし、上総も口が多いほりじやなかつた。

他の友達が「父親つてうれしいたい」「顔を見るのもいやだ」といほすのを聞くたび、どうしてそんなに話すことが多いのかが不思議でならなくなつた。一応一人暮しなのだから、それなりに話はするし、たまには注意されたりもする。でも、激しく言い合つたり、殴られたり、怒られたりとか、そういう生々しい経験はほとんどない。忘れているだけなのかもしれない。かえつて気が楽だ。来週の『母、襲来』に向けてはいろいろと相談しなくてはならないこともあるし、男同士でなんとか乗り切らなくてはならないこともわかつてゐる。

父がちらりと口にした言葉を、ふと思いついた。

「お母さんに見られてましいものは、かくして置きなさい、ましいものか……。

上総は本棚から『フィツジエラルド』と書かれた文学全集の箱を取り出した。わけがわからぬなりに、小学校六年までの

間に読みきつた本ばかりだ。

中でも『グレート・ギャツビー』は、ページに折れ目がついてしまったくらい、繰り返し読んだものだった。

中学に入つて最初に図書館で調べたのは、『グレート・ギャツビー』の原書だった。アメリカ文学はどことなく、文体が乾ききついて上総の好みではなかつたけれども、この作品だけは別だつた。何度読んでも、全く飽きなかつた。

箱に収めておいたのは、三冊ばかりのハンドティグラビア写真集だった。

数週間前、本条先輩からもらつたものだった。  
引き出しに、『グレート・ギャツビー』はいつでも取り出せるようにしまいこんでいる。

空いているから、しまいこんだだけ。

上総はぱらぱらとめぐりしまおうとした。

とたん、気になつた一ページがのぞき、広げなおした。  
真つ白いスリップ姿の、大体年恰好は十七歳くらいだろうか。ショートカットの悲しげなまなざしをした、少女のアップだつた。

初めて見た時から、このモデルには目が留まつた。  
机の上の問題集の上に、広げたまま置いた。父はいない。

大丈夫だ。

一、二分程度だと思つていたけれど、時計では五分以上たつていた。

黙つて身を硬くしたままじつと見入つていた。ただそれだけだつた。

もちろん、夜、父の気配もなくて、あとは寝るだけという状況だつたらどうしていたかは想像がついた。たぶん、衝動を押さえられなかつただろう。悔しいことだけ、自分の意志の弱さは

よくわかつている。

上総は息を深く吸い込んでぱたんと本を閉じた。

ショートカットの哀しげな少女は姿を消した。

母の直感というか、嗅覚は、かなり鋭く、ちょっと隠し事をしただけですぐに見つけ出す。父のようにある程度黙つてくれたらしいのだが、すぐに上総を攻めたてまくる。怖い。

まあ、父にも見られたくない本ではあるからして、どうにか処分しなくてはならないと思っていた。

まだ十時を回つていない。上総は居間に向かい、父が座つていなかを見渡した。

二人暮しだというのに豪勢な居間だった。臘脂に黄色の幾何学模様を施したじゅうたんが敷き詰められていた。父母どちらの趣味かはわからない。ここにしか電話が置いてないのは不便きわまりなかつた。自分専用の電話が本当は欲しいけれど、そういうものはない。

本をしまいこんだ後、暗記している電話番号をダイヤルした。

本条先輩の家だつた。

「はい、本条です」

声は確かに本条先輩のものだつた。ほつとして上総は名乗つた。

「立村、どうした、今日も暇か」

「用事があるから電話かけたに決まつてているでしょう。本条先輩、今、大丈夫ですか」

「ちょっとばかし眠い」

「また、ですか」

一年以上の付き合いで、本条先輩の女性遍歴はだいぶ見えてきた。周りで騒がれているほどに派手ではないにしても、することとはきつちりしているという。現在付き合っているのは、公立中

学の三年生だという。さすがにどういう子がまでは聞かないにしても、しおつちゅう泊り込んだりしているのは確かのようだつた。

「また立村、勘違いしているのか。全く、お前も最近は」言いかけて、ふと止めた。上総はちょっとだけ間を置いた。

「勘違いされるようなことをどうせしていらっしゃるんでしょう。俺は先輩の趣味についてとやかく言つつもりはありませんが。それより、少し相談したいことがあるのですが、そちらまでお邪魔してよろしいですか」

「どうせだつたら、俺が品川の方に行く。ほら、この前入ることができるなかつた喫茶店、『聖少女』だつたか。あそこにもう一度、入つてみよう」

「『聖少女』ですか。でも大丈夫ですか。本条先輩の家からだとかなり遠いですよ。別に駅前でもかまいませんが」

「いや、いろいろ事情があつてあの辺には立ち寄りたくな  
い」

理由を本条先輩は言わなかつた。上総も問い合わせはしなかつた。

「では申しわけないのですが、昼の一時に『聖少女』で「機嫌よさそうに、本条は受話器を置いたようだつた。

一応は先輩の顔を立てて敬語を使つてゐる。でも、二人の時に話す内容はかなり言いたい放題言つてゐる。学校から離れたらなおさらだ。先輩意識が皆無だといわれても仕方ないだろう。

上総もこいつのりは、本条先輩にしか使わなかつた。

中学一年、評議委員男子限定歓迎会で悪酔いし帰らうとした上総を、家まで送つていつてくれたのが本条先輩だつた。

ただビールをひとくちだけ飲んだだけ。上総はこの時初めて、自分が下戸だと知つた。まずいと思つたからすぐに、用事の

ある振りをして結城先輩の家から出た。自分では「まく」まかしたつもり。本条先輩もよく気付いてくれたものだとも思う。

まだ肌寒い四月中旬の午前様、父親が泊り込みというのをいいことに、初めて酒を口にした。激しい吐き気とめまいにふらになりながらも、なんとか外には出られた。本条先輩が追いかけてこなければ、たぶんその夜は苦しみながら野宿していただろう。下手したら警察に補導されていたかもしれなかつた。

朦朧としたまま歩いていた上総をすばやく、自転車に座らせ、途中休憩しながら品山まで送つてくれただけではない。たまたまその夜は父が泊りだつたこともあり、夜が明けるまで面倒を見てくれた。

してくれたのが本条先輩でなければ、きっと自分でも許せなかつただろう。

初めて評議委員会で本条先輩の発言を聞いた時から、こういふ切れ味のある人間になりたい、とあこがれた存在だつた。

学年トップの成績でありながら、ルックスもきりりとしたもの、銀縁めがねで少々格を落としているのがしゃれてい。学内では恋人希望の女子がたくさんいるというのに、他の中学、高校にそれなりの恋人がいるという。

一時期は

「本条里希は百人切りを目指している」

とか  
「初体験は小学校の時らしい」

とか  
「高校生を妊娠させた」

とか、かなり欲望にみちた噂が流されていた。どこまで本当なのかはわからない。ただ、それなりの関係を持っていることは確かのようだつた。

一年間、本条先輩からよく伝授されたことのひとつに

「することはしている。だが、相手を傷つけることはしない。男の義務として」

なる名言がある。

「複数の女子と付き合つのですから、傷つけないこともないんじやないですか」

「具体的に言つと、妊娠を絶対にさせないこと、そして病気を持たせないことだ」

去年の今ごろは、本条先輩から具体的な内容を聞かされるたびに、生返事を返していた。理解できない感覚だつた。もちろん上総に好奇心がなかつたわけではない。早い段階で、その手の知識は雑誌や本で大量にたくわえていた。ただ自分の身に置き換えて考えることができなかつた。本条先輩の感覚が自分と重なることがあるのだろうかとぼんやり考えるだけだつた。

### 本条先輩のようになれたら。

本条先輩のようにいつも冷静沈着に、それでいて必要な時はきつぱりと片をつけられるようになれたら。

軽さと重さを使い分けるだけの器量があれば。

いつしか上総の中で、本条里希先輩の存在は自分のありたい姿に変わつてきていた。軽い調子で語りかける心地よさと、うじうじしている連中に對して一気に畳み掛ける迫力どが交じり合ひ、本条先輩特有のカリスマ性をかもしだしていた。上総がいかは手にしたいものばかりだつた。

いつも、クラスの問題が起つた時、いつしか上総は「本条先輩だつたらどうするだろつ」「本条先輩ならこつこつ時どう考えるだろつ」と問い合わせる癖をつけていた。

美里と話す時も無意識に、「本条先輩だつたら……」と口にすることが増え、よく言われたものだつた。

「立村くん。本条先輩ならこつするかもしぬないけど、立

村くんはどうしたいの？」

「そうだな……俺だったらたぶん、本条先輩の案をもう少し  
しひねるだろうな」

「じゃあ、無理に本条先輩のことを意識しなくたつていい  
じゃない」

美里には、上総が感じている本条先輩へのあこがれを理  
解してもら「う」とは難しそうだった。決してそれ以上は口にしなか  
つたし、わかつてもらおうとも思わなかつた。

「でもね、本条先輩の彼女つてかわいそうよね。何人目?  
この前、こずえから聞いたけど、また駅前で別の女子と歩いてい  
たんだつて」

「先輩の偉いところは、青大附中で決して、手を出さない  
ことだろ? うな」

「偉い? そうかな。ただ自分の身を守りたいだけなんじ  
やないの。私は本条先輩を、評議委員長としてはすこく尊敬して  
いるけれども、ただね、ああいつ付き合いは絶対にされたくないな」

部屋に戻り、大判の封筒に三冊の写真集を突っ込み、バ  
インダーにはさんだ。財布だけをポケットにつっこみ、腕時計を確  
認した。特に見られて困るようなものは、あと見当たらなかつた。

アイドル狂いの結城先輩は、かなりきわどいアイドル  
ポスターを持つていいようだが、上総の部屋にはなかつた。

羽飛貴史だつたら、それこそ鈴蘭優の写真集を全部持  
つているらしい。隠すこともなく、堂々と本棚にならんでいるのが  
すごい。どうして隠さないのか聞いたら、

「なんで隠すんだ?」

と、反対に問い合わせられた。現役アイドルだから、それほど  
えげつないアングルのものは少ないのだろう。

空気を入れ替えた後、麻布のベストをはおり上総は出か  
けることにした。本当だつたら自転車で駅前にしてほしかつたのだ

けれども、本条先輩の希望だ。仕方がない。風がまだまろやかなうちに店に入っていたかつた。昼からはだんだん暑くなるだろう。父にも声をかけず、上総は家を出た。

歩いて十分くらいのところに『聖少女』は建っていた。

ひつそりとしたたたずまい、舗装されていない道、瀟洒な和洋折衷型茶房として、知る人ぞ知る六場だった。

小さい頃から上総は、母に連れられてお茶をすすつたり和菓子をいただいたりしていた。遠くから車で来る客を見込んでか、いつも駐車場は五台の車で埋め尽くされている。暇ではなさそうだ。でも座れないほど込み合っていることもなかつた。

薄暗い店内の中、金をあしらつた花柄のソファーに、黒大理石のテーブル、小さめのシャンデリアが遠慮がちにぶら下がり、格子戸は田線のところまですりガラスを使つていた。頭の上くらいしか見えないので、誰がいるかなんてことは、外からは見えない。

露草の紫だけが色のアクセントとしてちらついていた。ふつと、何かの拍子に薰るのは、膝まで伸びる青草の匂い。なんとなく、手元でちぎってみた。緑色の液がついたのは、柔らかい草だつたからだろうか。

上総が『聖少女』を友達との待ち合わせに選ぶのは、本条先輩と会う時だけに限られていた。

もちろん一回のお茶代が千円ほどかかるという、経済事情も絡んでいる。上総にとつてはそう大金ではない。あまり無駄遣いしない性格だから抵抗はない。貴史をはじめとする同学年の連中とは、やはり金銭感覚が違い過ぎた。本条先輩の場合は、一回千円感覚のお茶を、「もつたいない」ではなく「ちょっと楽しめる」と感じてくれた。

かすかにさわさわとゆれるしだれやなぎの並木に、上総は田をちらつと留め、すこし重みのある道を歩いていった。おとこの雨が、

まだ地面の下に残つてゐるのだろう。吸い付きのいい土の感触が感じられた。

普段だつたら自転車を使う。でも、『聖少女』に行くのならばそれなりの雰囲氣で足を運びたい、上総のこだわりだつた。

ひとりぼんやりと、煎茶と和菓子のもてなしを受け、いろいろ想像をめぐらせていると、なんだかすべてのことが屏風をたたむよう片付いていく。そんな気がした。自分の部屋では感情に押し流され思わず泣いてしまいそうになる時も、ここだつたら、無理なく耐えられる。

引き戸を開けて、軽く会釈した後、案内されたのは一番奥の窓際だつた。客は、ひげを蓄えた上品な老紳士と、腰まで髪を伸ばした大学生風の女性だけだつた。一人とも、「抹茶セット」を注文したまま、文庫本を読んでいた。たぶん、常連だらう。店の方も心得ていてか、たまに冷えた番茶を入れ替えてあげたりして程度だつた。追い出そうとする風でもない。

おそらく上総の顔を、小さい頃から見覚えているだらうに、それでも不必要に立ち入つてこない適度な接客態度に、いつもほっとしていた。

ソファーにまず、バインダーを置いて後、やはり抹茶セットを選んだ。これだとわざわざお茶を立ててくれた後に、和菓子三種類を選ぶことができる。でも本条先輩を待たずに食べるわけにはいかない。

「もうひとり来てからでいいですか」と一言添えた。

本条先輩が来るのは、あと十分くらいしてからだらう。

いつもながら、本条先輩の姿は自分とひとつ上だとは思えなかつた。

笑みを浮かべながら、一言一言、尋ねた後すぐに上総の居る席に向かつて歩いてきた。

「お前のことだ、後ろの方にひっそり座つてこるとは思つていたんだけどな」

「さすがよくお分かりです。今日は呼び立ててしまつて申しわけありません」

「なんか用でもあつたのか

「いろいろと」

「上総はすぐに答えられず、軽く「まかした。思い出した。  
「もしお時間があるようだつたら、と思つただけです。評議の関係でもあつたから」

「なに硬いこと言つてこるんだ。どうせ、俺に会つたからだろ」「学校で毎日こやつてほどお会いしていふつてこつのに、なんでいまさら呼び出さなくてはならんじんですか」

敬語でするすると飛び出す。上総にとつて普通の言葉。

「まあいこよ。愛の裏返しだろ。それはともかく、俺も立村に確認しておきたいことがあつたからなあ」

「先に注文しませんか。ここでは抹茶セツトが一番いいと思ひます。立ててもらつた抹茶と、和菓子がお好みで三個選べるといつ、なかなか豪華なセツトです。俺はそれで頼みますが、本条さんは」  
「それなら変わつたのにした方が面白いな。この、クリーミムみつまめセツトといふのに非常に俺は引かれるんだな」

本条先輩は酒に強くせに、甘党だった。

注文も終り、上総は潜めた声で話を持ち出した。

「この前の、一年学年集会のレポートなんですが、一応出来上がつたのでもつてきました。学校で渡してもよかつたのですが、直すところがあるなら今日のうちに直しておきたいので」

金曜にまとめたものだつた。実は土曜日のうちに付いていた。  
無理に早くしなくてよかつたのだけど本条先輩に会う口実としては、ちょうどいいものだつた。

「ああ、あれな。クイズ大会といふのは、なんだか去年の秋、やつ

たものと同じのような気もするが、まあぼろがでなかつただけ、よしとするか。杉本梨南もよくがんばつたしな

「杉本、だけ、と言つた方が正しいですね。正直なところ

「今年の一年はどつしてああも、いいかげんな奴ばかり揃つたのか理解に苦しむよな。立村。何よりもなぜ、あそこまで男子と女子がいがみ合つてゐるのか、俺には全く理解できねえよ。見た目可愛い子もいるつて、このに、誰も口説くつとしない。もつたいないことするよなあ」

「お願いですから、本条先輩が手を出すのはやめてください。これ以上複雑になつたら、もつと目も当てられませんから。それに来年俺たちが三年になつた時、地獄を見そなうな気がしますから」

現一年生の『やる気なさ』には、上総を始めとする一年生、および本条先輩を含む二年生も頭を痛めていた。おそらく、委員の選出方法が今年の一年担任一同によつてかなり変更されたからだろう。去年までは「評議委員会」イコール「青大附中内社交界」としての地位を確立してきたのだが、一部の教師から『もつと部活で自己表現をするべきでは』という声があがり、最初に部活を選ばせた後に委員を決めるという方法を取るようになつたといふ。

去年はその逆で、委員会を決めた後、可能かどうかを調べつつ部活に入るという形式だつた。必然、委員会が最優先とされ、部活には入れないとあきらめる者も続出した。体育系の部活に入りたかったのに意に反して委員会へ放り込まれた奴にとつてはかなり悔しい現実だつたらし。

なぜ一年の評議委員がまとまつてゐるかといふと、深い意味はない。体育系の人間が全くいなかつたからだつ。文化系でやるべきことは、ほとんど評議委員会で可能なことばかりだつた。合唱も、演劇も手芸も文芸も、映画もビデオも音楽も、みな評議委員会でまかねる内容のものばかりだつた。

「言つちやなんですが、喜んで評議になつた奴がほとんどいません。

それは大きいですね。もつとも俺も最初はやる気があつたわけじゃありませんが。でも、一ヶ月くらいで慣れました

「自分で慣れると、思つてゐるのかよ。全く、お前はだからガキだつていうんだよ」

表情はさらつとした笑みを浮かべたまま、本条先輩は上総に向かい、つぶやいた。

「もちろん、本条先輩、結城先輩を始め、先輩たちには感謝しますよ。もちろん」

「お前の面倒見てきたのはほとんど俺じゃないかよ」

「否定できない」ところが辛い。

「とにかく、今年一年生をもう少し仕込まないと、来年苦労するのは今年の一年生なんだからな。夏合宿の時になにか考えた方がいいかもしけないな」

「ただ、杉本が……」

上総はもうひとつ、気になつてゐることを告げた。

「杉本梨南のことなのですが、俺から蠱廻目なしに見ても、かなり切れる頭を持つていてると思います。あの一年の中でも、杉本だけは認めていいんじゃないかな。第一、ほとんどクイズ問題の設定から点数付け、あとは構成実行までプランを組んだのは杉本でしたし。それと他の連中を一緒にするのはちょっと、まずいんじゃないかな」

「お前は杉本をひいきしてるからなあ」

「まともに話して通じるのが一人だけだつてことです。それに、杉本は一生懸命ですよ。準備の間もしおつちゅう、俺に質問を浴びせてきましたし、わかりづらくないようになると文章でまとめていろいろ相談持ちかけてきましたしね。その内容がみな、論理だつていて、わかりやすいんだな。これはやられた、と思いましたよ。あれでもう少し、人当たりがやわらかければ問題ないんだけどな」

杉本梨南のこと話を聞いて、ついでに、自分でも止まらなくなつて

きた。

一年生の中でも唯一、やる気を見せている女子評議委員一年生だった。

案を練つてこらつちに他の一年男女がみな、用事を思い出して帰つてしまつた中、杉本だけは自分なりに計画をこしらえて、上総あてに提出してきたのだった。一年生が補佐をして、一年生だけで計画、実行するという形式だったのだが、実際は杉本梨南が計画を立て、上総たち一年生と本条たち三年生が手伝つた、というのが真相だった。

手伝つた部分というのは、杉本が苦手としている、男子生徒たちとの折衷であつたりもしたし、教師たちとの打ち合わせでもあつた。そう、男子との受けが異様なほど、悪い女子だった。

上総から見ると、そんなにむかつくことはしていないように感じられる。むしろ、人見知りが激しい分、信じられる相手にだけは本心を見せるという、ひたむきな部分が見え隠れした。上総には、しつこいくらい質問の手紙をよこしてきた。こんなことまで考えるのか、と思つくるくらい影の部分まで目を配つていて、上総はかなり驚いた。

『立村先輩にどうしても、お願ひしたいことがあります。私は男子に嫌われていると思うので、私が言つたらきっと、いやがられると思います。でも、この企画はクラスの男子たちにも参加してもらわないと、意味が無いと思います。ずうずうしいお願ひだと思いますが、先輩の方から、その旨を伝えてもらえませんか』

切実な問題だったので、上総はすぐに手はずを整えた。

先輩から後輩への命令は、理不尽でなければ絶対だった。

杉本が自分の苦手分野を理解して、どうやってうまくいくかを冷静に考えているところが、上総からすると偉いと思うところだった。だからつい、夕方まで相談に乗つたり、話をしてやつたり、たまには別のことで助言してやつたりと、自分なりに気を遣つていたのだから。

それが、本条先輩の言つ

「お前はひいきしているからなあ

に繋がるものもしなかつた。

仕方ない。わかるのだから。

杉本梨南が必死に努力している苦しみが、伝わるのだから。

似た者どうしなのかもしぬなかつた。

ただ、女子だから、異性である分、優しくしてやれるのかもしぬなかつた。

「そうだな、杉本に關してのみ、例外にしてやらなくちゃならないな。ただな、あの子も、悪いが、女子としてはちょっと、避けたいタイプであるのも認めなくてはならない事実だ。お前の趣味はだいたい見当ついているが、いかにも男子を小ばかにしたような言い方は、やめさせないとまずい」

「本人はあれでも精一杯、氣を遣つているつもりなんでしょう」「でもな、『ぐだらないこと』でべたべたしている暇があつたら、もつと考えてください』なんて言えるか？普通。あれはまずいと思つたぞ。まあ、立村がしそつちゅう杉本の性格について弁護していふから、俺も大体、受け流すことができたけれどな。一年の連中にも同じこと言つていていたら、殴つてやりたくなるぞ」

「理由はありますよ。最初の頃、杉本のこととで本条先輩、かなりまずいことを言つたでしょ。それですよ」

「なんか、言つたか？ 僕？」

「自分で考えてください。悪いけれどあれも、俺はまずいな、と思いました」

ようやく運ばれてきたセットもの二種類を受け取り、上総はまず、茶碗を両手で抱えた。

「たぶん、相手が清坂氏とかだったら、冗談で受け流してくれると思いますが、でも杉本の場合は、かなりそういうことをいわれたくないとかたくなふと思つていたようですね」

「ははあ、あれか」

ようやく気付いたようで、本条先輩は軽く舌打ちをした。

「相手を選ぶべき、だつたかもな。一応俺としては、讃め言葉のつもりではいたんだが」

「女子はそう思わないでしじう」

「いや、他の子とかは喜ぶけどな。『君の胸は握りこむのがある...』とか言つと」

そりやあ、先輩の前で見せられる相手だからだろ？

心で思つたけれども言わずにしまつておいた。

杉本梨南の胸が、他の女子にくらべてふくよかで、かなり目立つていたことを否定はできなかつた。上総も早い段階から、その点に気付いていた。本条先輩の気持もわからなくはない。しかし、思つても絶対に口に出すべきことではないだろ？

すべての部分で本条を手本にしたいけれども、女子に対する感情だけは絶対に重ねたくなかった。

理解できぬままでいたはずだつた。去年までは。

上総はワゴンで運ばれてきた和菓子を三種類選ぶことにした。琥珀色の羊羹と小ぶりのヨーグルトケーキ、あとは卵色にほんのり焦げ目がついている桃山だつた。

「お前も結構甘いもの好きだろ」

「和菓子が甘くないわけないじゃないですか」

意味ありげに本条先輩はじつと上総の手元を見つめた。他の奴だつたらいらだつのに本条先輩にされるのは平氣だつた。

本条先輩があんみつを平らげ、上総がヨーグルトケーキを食べ終えた段階で、ふたつ前の席に座つていた女性が会計を済ませ、店を出て行つた。

よかつた。

「こういう話をしている時に女性がいるのを感じるのは、やはり恥ずかしいものがあつた。

もつとも本条先輩はさつきから『氣』になっていたようで、なにかあると振り返っていた様子だった。『青大附中の女たち』の名は伊達じやない。

「ところで、いいですか」

桃山を指差して、食べるかどうか尋ねると、答える間もなく本条先輩は箸で素早くつまみ、まるごとほおばつた。

「もう少し味わつたつていいじゃないですか」

「人の食べ方に口出しするなよ。おいしいものはおいしいんだ」

上総はさらに声を潜めてささやいた。

「お願いしたいことがあるのですが、かまいませんか」

「なんだよ、まじめな顔をしてさ」

上総は脇に置いていたバインダーから、大判封筒を取り出した。中には例の写真集が三冊、入っていた。

「先日お借りしたものなんですが、学校で返すのもまことにどうから、ここでお返ししていいですか」

袋を受け取り、中をのぞき、本条先輩はきょとんとした表情で上総に尋ねた。

「これ、お前にやつたんだから、別に返さなくともいいってさ」

「それはわかつてます。でも、やはり借りたものはきちんと、お返しするのが義務ではないかと」

「どうしたんだよ。立村、使わないわけじゃないんだもん」

「そういうわけではないですが」

「ゴ」もつた。さすがに「母に見つかったら半殺し」なんてことは言えなかつた。いかにも何か、怖がつてゐる臆病者に思われそうだつた。

本条先輩だつたらきっと、堂々と本棚に並べているか、机の中にきちんと整理して納めているのだもん。

「それとも、中のモデルの好みが合わなくなつたとか」

「そういうわけでもありません。すみません。本条先輩には感謝しています。ただ」

「ははあ、誰が好きな女子でも出来たのか。でもそれだったら、な  
おさら必要だよな。欲求不満もたまるだらう」

「本条先輩、どうしてそういうことに話が結びつくんですか」

「いや、だつてさ、立村の場合だと顔にすべて書いているか、見  
見ていておもしろい」

思ひ当たる節があるのが、悔しくてならなかつた。本条先輩のま  
なざしは千里眼だ。上総の考えてこるにとんに關してのみ、すみから  
すみまで見通すのが怖かつた。

「まあいいよ。また後で別のタイプのをやるからね。ちなみに立村、

「この中ではじの子が好みだつた?」

「うひこひとこひで話すことじやないでしょ?」

隠しても無駄だとわかつていながら、上総は田をやらしたまま答  
えた。

「無理にとは言わないけどな、そのことばかり考えて発狂しそうに  
なつてゐるよりも、そんなもんだと割り切つたほうがいろいろ楽だ  
と思うよ。お前、いつもそうだる。自分だけそつ思つていてると信じ  
込んでいるだらう。だからお前はガキだつて言つんだよ」

口調は真撃で耳に残る。

言い返せずに言葉を搜す。

見つからず、こりこりした。

上総をやわらかく見つめたまま、本条先輩はゆつくり、言葉を継  
いだ。

「なんとこひかせ、一年になつてから立村、俺の話をずいぶんまじ  
めに聞くようになつただろ?。いや、評議関係ではなくて、付き合  
つてゐる時の」ととかさ」

「そりやあ、一年本条先輩のもとで勉強すれば、関心も持ちますよ  
」ぼそつとつぶやき、ずつと田をそらしていた。曇り硝子の向こつ  
側を見通すように睨みつけていた。

「それまでは、信じられないって顔であきれ果てていたくせにな。

どうして女子とそういうことするんですか、とか言いたそうな顔しててさ。結城先輩も気付いていたようだ。よく話していたよ。『立村をもう少しまともなすけべ野郎にしないと、このままとまざいぞ』とか言つて。だから一人で相談して、お前が好きそうなタイプの写真集を選んだというわけなんだ。結城先輩も卒業したから、もう時効だけどな』

全身が熱くなり、逃げ出したかった。

表情を見せたくないくてずっと反対の方を向いている上総に、本条先輩はいらだつようすを見せなかつた。

一年に上がるまえの春休みまで、なぜクラスの連中が女子の胸や唇について騒ぐのか理解できなかつた。

猥談の席にいたこともあつたが話だけをふんふんと聞いて、あわせていた程度だつた。

その頃はまだ好奇心だけが先行し、実際の感覚がどんなもののかわからなかつた。ただ、語つてゐる連中の顔がどうしても気持ち悪くなり、たいていは途中で抜けた。

本条先輩と一人でいる時は一応、聞いてやつてゐるという態度を取り、半分無視した態度で聞き流してしたものだつた。

しかし、実際に経験してみると湧き上がってきたものは強烈すぎてコントロールできない代物だつた。許せなかつた。

一度は鏡をみつめて。その瞬間どんな顔をしているのか見据えたこともあつた。効果はたしかにあつたと思う。がまんできるところまでは堪えようと思えた。

結局は屈してしまつ。自分の弱さが許せなかつた。

つまくみせないでいられる自分でありたかった。

授業中いきなり昨日見た夢を思い出したり。

何かの拍子に女子の素肌に触れてしまつたり。

本条からもらつた写真集をめくつていろいろひきこ、逆流していくように我をわすれてしまいそうになつたり。

本条先輩の言つとおり、誰にでもあることなのだから、上総も全くそういうことを知らずにいたわけではなかつた。頭の中ではわかつていた。身体の中でも答えは出でていた。

絶対に本条先輩のように『欲望の赴くまゝに』突つ走つたり、南雲のように告白をかましてしまつたり、手と手をつないでにやにやするようなカップルのようにはなりたくなかった。目をそらしてくてならなかつた。

写真集の、哀しげな少女のまなざしをじつと見つめ、写真の美しさについて語ることができたならどんなに楽だつたらう。

そういう人間でありたかつた。

夜の夢に出てくる顔のない女性を押し倒すような夢におぼれたくはなかつた。

裏切られるたび自分を責めた。

母に見られたくないから写真集を返すといつのも、口実に過ぎない。

本当は、誘惑に負けてしまつ自分を思い出してしまつから、自分の手に届かないところまでおいややりたかつただけだつたといつこと。美里との「付き合い」がもしかしたら、自分の激しい感情に裏打ちされているから受け入れただけなのかもしれないといつ、恐怖から抜け出したかつただけだつたこと。

結局、美里とどうして「付き合い」ことを受け入れてしまつたのか。

本条先輩は、どうやつて、付き合いたいと思つたのだう。

やはり、気持いいからだうか。

第一、「付き合つ」つてどういふことだ?

恋愛感情つて一体なんなんだ?

身体が勝手に反応するくせに、清坂氏にはやつこつことを感じたことがない。わからない、なんで俺は

「いいよ、清坂氏だつたら」

と脳天気な答えを返してしまったんだろう。

本条先輩の表情が全く変わらないのが救いだつた。

上総はのど上から空気を込めたような声で、わざやき返した。

田を上げることはできなかつた。

「本条先輩、すみません。でも今は受け取つてください。理由は聞かないでください。どうしても今は言えません」

「そうか、まあいいよ。溜まつてがまんできなくなつたら、遠慮なく言えよ。つちこはこのくらゐの写真集だつたらいくらでもあるから」

男四人兄弟の末っ子という本条先輩は、たぶん田常的に猥談をしなれているのだろうし、常識をわきまえた範囲内でおおっぴらに語ることも抵抗がないのだろう。顔を赤くすることもなく、堂々と自分の感じたことを言い放つ性格が、上総はたまらなくひやりやましかつた。

他の連中だつたら、絶対自分の中に入れたくなかつた。

本条先輩だけは別だつた。

こんな風に振舞えるなら、自分を許すことができるだひつに。こんな風に、俺もさらつと流せればいいのにな。

どうしてこういう性格になつてしまつたんだろう。

そういうものなんだつて、あつさり受け入れてしまえればいいのに。

まだ俺は、本条さんのようにになれない。

自分なりに精一杯、努力してきたつもりだけど、結局は感情に流されて、衝動に屈して、あとでめいっぱい後悔するような人間のままなんだ。

こんな奴をどうして、清坂氏は「好みだ」と言つてくれたんだろう。

付き合ひつてこいつ意味すらわかつていないくせにあつさり、流

されて受け入れてしまうような俺の性格が、たまらなく腹立たしい。金曜日の放課後にもっと、何か、言い方なかつたんだろうか。情けない。

雲がうつすらと層状に広がってきた。浅い黄金色の輝きが窓に反射した。品山の山色は、決して水色ではなく、近くの緑色がかすかに迫つてきている。山の近くゆえ天氣も変わりやすい。

もうこんな時間かと、上総は本条先輩に時刻を尋ねた。

「どうせこれから暇なんだ。卓球でもやりにいくか？」

「そうですね。久々に。今回も勝たせてもらいます」

ひそやかに勝利宣言をした。卓球だけは、誰にも負けない自信がある。

「冗談抜かせ。今日こそ立村の連勝記録をストップさせてやる」

並んで歩くと、本条先輩の方が首ひとつぶん背が高かった。

まだまだ、この人にはかなわない。

背伸びしたつて届かない。

でもいつか、一対一で話ができるような人間になりたい。伝票を持って立ち上がった本条先輩の背を追いかけた。

毎朝、古川「じゅえ」との『朝の一戦』は気合を入れていどまなくてはならない。

「あんた童貞?」

とぴょんと聞かれた時に、上総は鳩が豆鉄砲くらつたように、しばらく無言でこずえの顔を見返していた。

後で貴史に一言

「お前さあ、もう少し何か反応しろよ。あきらかに立村、それだつてこじがばればれだらうが」

と言われて、さらに動搖した。自分なりにかわしていたつもつではあつたのだが、周りからしたら、

「恥ずかしさのあまり絶句してしまつたかわいそつな立村くん」

という結論しか引き出せなかつたのだらう。

仲のいい連中はだいたいが、六月までに誕生日を迎えていた。貴史が五月、美里が六月初旬、こずえは四月。上総は九月十四日生まれ。明らかに末っ子扱いされている。あまり気にしないようしている。

こずえは楽しそうにそこをついてくる。

なにかあると

「本当に立村つて私の弟つて感じじよね」と言つ。

「血がつながつていなくて、本当によかつたよ」まだ際どい言葉は出でこない。

ほつとした気持ちで上総は次の授業準備をした。

朝一番は英語の授業だつた。得意分野だ。すでに英語の小道具であるカセットテープは運んできた。音楽の授業とちがつて、ちゃんと一台でしたんだ。

「リーダーの暗誦部分、きちんとやつてきた?」

「やらなくちゃ、立たされるだろ」

教科書一ページ分を一週間かけて暗記し、ひとりひとりが抜き打ちで暗誦しなくてはならない授業だった。出来ない人は教室の隅に立たされ、一時間じつと待つていなくてはならなかつた。

幸い上総には、『方程式は覚えられなくても英語は全部暗記できる』能力が、神さまからあたえられていた。その点は悠久としていられた。

ひとりだけのうのうとしているのも気が引けるので、こつそりカンニングペーパーを作り、かなりまずいという連中に渡すことも忘れてはいない。

机の上に見えないよう貼り付け、それを読みながら暗誦した振りをするのだった。先生の机からは見えないはずだった。美里も貴史も、そのお世話になつてているのはいつまでもなかつた。

「どうして立村つて、文系ものだけこつも得意なわけ?」

「知らない。好きだからだろ」

「いつたい、いつ勉強しているの?」

「夜かな。一番頭に入るのは十一時くらい。三回くらい一音読して、五回暗誦できれば、あとは寝るだけで問題ない」

珍しく下ネタを持つてこない。今日ははじめて英語のネタか。と思いつつ英和辞典を取り出した。

「一晩寝ると忘れていたりしない?」

「全然。かえつてよく頭に入つていたりする」

「ふうん、なんだ」

「いざえはなにやら思いついたようにせにやしながら頬杖をついた。

いやな予感あり。上総も用心深く言葉を継いだ。

「寝る前に読んだり観たりしたものは忘れにくいつて本当

だよな

「ふうん、夢に英語が出てきたりする？」

「社会の年号を覚えていたりすると、明治時代にタイムスリップした気持ちになつたりする」

「ふうん、じゃあ、さあ、夜見る夢に、誰かさんがでてきたりしないの？」

「誰つて、歴史の登場人物とかか？ それはたまに……」

「こずえは下からじーっと見上げた。

「おかげ本の女の子、とか？」

「言われた意味がわからなかつた。

「立村のように、記憶力が鋭い奴だったら、当然、見ているよね」

「何、それ。もつとわかりやすい表現を使ってほしいな。

第一なんだよ、その「おかげ本」って」

「ははあ、立村つてば、まだ未経験なの？ [写真]の方は、あ、わかつた。まだうちのクラスの集合[写真]使つてるんじゃないの？ 一年同じクラスだったら、結構、『使える』[写真]とか、たくさんあります[写真]やないの。セクシー系とか」

上総は無言でこずえの口元を見つめていた。

頭の中に言葉が混乱してきて何を意味するのかがつかめない。

何か、じょうもないねたを振られているのはなんとなくわかる。

でも、何が『使える』[写真]なんだろう。

なんで、うちのクラスの集合[写真]を使う必要、ある

んだ？

「やだなあ、私もあんたの夢に出てあーんなことやこーんなことをせられているかもね。記憶力いいのも、考え方だよねえ、

美里

美里もいつものパターンだと知っているのか、まぜつか

えしてくれたりする。軽く、

「こずえ、やめときなよ。えげつないよ」と残して、さつさと自分の席に戻った。

授業が終り、男子は男子、女子は女子と分かれ、保健体育の授業に移つた。青大附中では性教育の時間をしつこいくらい取り込んでいる。教科書そのものはさほど、詳しい内容が記述されているわけではない。ただ、何かと云うと月一回は生殖関係の話題を先生達が取り上げる。一年の頃だつたら妙に授業前、授業後の盛り上がりがすごいものだつたが、今ではそんなこともない。ひつそりと、いつかは自分の実践用に役立つことあるのか、と考える程度だつた。大して関心のない顔をし、通すのが自然なものだと思つてゐるようで、あえて話題にすることもなかつた。

この組の教室に移り、あいうえお順に並んだ。隣のクラスとはいえ、ほとんどしゃべつたことのない奴も多い。一番後ろの席で貴史とふたり、テレビ番組の話をしていた。もつともほとんどは、貴史のお気に入りアイドル『鈴蘭優』の出番が少なかつたとか、最近は大人っぽい系統の服が多くなつて不満だとか。肝心の番組を観ていらない上総はあいづちを打つしかない。

「サインもらいたいとか、思うのか？」

「そりや、欲しいに決まつていいだろ。懸賞にも応募しているけどなああたらねえよ。競争率高いものなあ。立村はあまり、アイドル系とか好きじやないのか」

「いない。いないな」

いつものように同じ答えを返した。

「前から言つていいけど、同じ顔に見えるんだよ。ちょっと雰囲気がいい、という写真とかはあるけれども、だからといってそういう人がいっていいうのはないな」

「優ちゃんのかわいさをわからない奴がここにもひとり、

と。お前だつたら『榛野七草』あたりかなあ。ああこひすみつと飯の強そうな色っぽい感じの子も、好みじゃねえのか

「誰、それ」

思い当たらず、上総は首をひねつた。貴史もむかむかしてためらい気味に、

「ここだけの話だけどな、美里の昔の相手、よくあいつのことを『榛野七草』に似てこりつて言つていたんだと」

「やうなんだ。今度じつくり見てみよう」

「言われてみると、なあ、確かにこつて思つなあ。ぞくぞくするつてところはないけれど、はつきりした顔の雰囲気はなんだかそれっぽいかもなあ。お前、じつ思つ？」

初めて聞く言葉が飛び出して、上総は口感いながらも自然に流した。

「清坂氏もやはり、付き合つたことがあるのか」

清坂美里は『付き合つ』の意味を知つているらしい。

昔の相手、つてことだと、そつなんだううな。

「でも安心しろよ。とつくに別れた」

「なんで俺が安心しなくちゃいけないんだよ」

いいのか。幼なじみとはいえ、知られたくないことを平気で言つのは。

「気にしてこるくせに。まあいい子だな。俺には関係ねえよ。それよか、立村。今日の古川、じつにうネタを降つてきた？  
また『あんた童貞？』か？」

「そつこつわかりやすい言葉じやなかつた。なんだかさ、テレビの語学番組でよくやる『スキット』をやらせているみたいだよな。クラスのみなさまを楽しませるために、古川さんと漫才やらされてこる気がする」

「お互い、ネタを用意しあつてきているのが、よくわかるもんない。立村、お前も芸人になつたよ」

「好きでやつてこるわけじやない。」一いちだつて散々今ま

でひどい目にあつてゐるんだ。全く。一度は逆襲したことひひの気持ちが治まらない」

上総はかいつまんで朝の『夜の記憶力』について説明した。

キーワードは『夜』だから、かなり際どいネタ振りをしたかったのであらう。受ける側の上総が理解できないまま授業に入してしまった。

本当は古川「ずえ」にもう一度確認してみたかったのだが、どつぼにはまるのも目に見えていた。男子だけの授業といつにともあるし、羽飛に聞いてみようとは思つていた。

立村の英語に関する記憶力は確かに尋常ならざるものあるよなあ。俺、すげえうらやましこよ。でも歴史関係は俺もたまたまに夢に見る。織田信長と友達になつちゃつたりとかさ

「俺はそこまで遡らないな、せいぜい明治大正前後。鹿鳴館のあたりを歩いているとか、のどかな感じの話。さわやかな目覚めを迎えるかもつて話ばかり

「さわやかな目覚めかあ…………」

羽飛は、指先でとんと机を叩いた。

「で、立村はどう反応したんだ?」

「言つてゐる意味がわからないから、そのまま黙つて聞いていたよ」

「お前、本当に、ばかか」

と「うとう」羽飛は腹を抱えて笑い出した。

「そりやあそだよなあ。俺も優ちゃんの写真集とか、観て寝たら夢で出てくるかもと、思つたことあるぞ」

「実際出てきたことあるのか?」

「ねえよ、そんなの。でもな、確かに夢の中でどつこつ展開になるかは、そりやあ、古川のことだ、想像してゐるだらうなあ。おい、ここまで言つてもお前、わからんのか」

わからず上総は聞き返した。

「ごめん。俺はやつぱり鈍いんだ」

「で、最後にクラス写真まで持り出しだのかよ。まあ、立村がまさか、古川の写真見てあーんなことやーんなことをしている夢見ているとは、誰も思わないけどな。でもまんざり嘘じやないつてことか」

しばらく考え込むつむじ、ぴんとくるものがある。

おかげ本、という言葉に、反応するものが確かにある。昨日返した写真集の束を思い出し、上総はふうっと息を

ついた。

「つまりなにか。古川さんは俺に、限りなく失礼なことを言つていたつてわけか」

「立村、あの場で気付かなくて良かつたなあ。図星か濡れ衣か、その辺は追求しないでおくけどな

「濡れ衣に決まってるだる！」

「クラスの女子をおかず代わりに使っていたんじゃねえかと言われたら、そりや、むかつくだろうよ」

口調だけおだやかにつぶやいたつもりだった。

「いつたい何考えているんだよ、古川さんの頭の中、一度勝ち割つてのぞいてみたいもんだな。普通朝一番に浴びせる話題じゃないよな。まったく。本当に女子の考えていることってわからな

い

はたして貴史がどう感じているかは見当がつかない。

「だから清坂氏に『あまりえげつないこと聞くな』って言っていたんだな」

「へえ、美里そんなこと言つていたんだ。いつもだつたら調子に乗つてつみにみにくるの。それも仕方ないか。相手が立村だからなあ

てくれるんだろう

「俺がそういう話嫌いだつてわかっているから、気を遣つ

「そういう気遣いできる女子だと思うか？」美里が

貴史は鼻で笑いながらさらに続けた。

「六年の時に、『男と女』の違いについてスライドを見せられたことあつただろ？その時にさあ、俺に聞いてきたんだぜ。『本当に男子つてああいう風になるの、具体的に説明して』って」

具体的に説明つてどういうことなんだろう。貴史と美里の「ンビ」がどういう会話をしているのかが、容易に想像できてしまい、奥歯で笑いをかみ殺した。

「清坂氏なら、やりかねないな」

「だから聞いてやつたんだよ、俺だつて。月一回のあれつてこつのが具体的にどういうもんか、教えろつて」

「どつちもどつちだな。で、どう答えた？」

けろりとした顔で答えた。

「次の日、百科事典一人で見て確認した。ああ、そういうことなかつて」

「ふたりつていうのが、なんだかすごいなあ

保健体育の授業は、知つてることをいまさら聞いてどうする、というのりで終わつた。教科書を尻目に、別のことばかり考へているふりをしていた。性教育のテストだつたら成績が悪くても可愛げがある、そんな雰囲気すらあつた。

「女子の方は盛り上がつただろうなあ

「おそらくな

貴史ののんびりした声を聞きながら上総はD組の教室に戻つた。

「これからひとつ、反撃だ。

「古川さん、あのわ」

「どうしたの、保健体育の授業で興奮したの？」

「新しいネタを仕入れてきただろ？」

次の授業、国語の教科書で軽く壁を作り、上総はささや

いた。

「朝のスキットの説明を、羽飛に全部してもうつた」  
じつとこずえの表情をつかがつた。

「羽飛に聞いたわけ？ ばっかじやないの？」

「申しわけないな。ピンとこなくてさ」

もうひとつ、大切なことを伝えねば。

少しだけ間を置いて尋ねた。

「あんないじ質問、羽飛にしてみたらどうだ？」

古川こずえが羽飛貴史に、一年の頃から惚れぬいている  
のは周知の事実だった。上総に向けるような際どい質問をしない  
のは、きっと恥じらいがあるからなのだろう。 禁じ手だ。普段だ  
つたら上総も人の弱みにつけ込むようなことはしたくない。

こずえはしばらく

「なによ、なんで羽飛に告げ口するのよ、ガキじやあるま  
いし、何よ、ばか」

ぶつぶつぶやき、上総をにらみつけた。知らん振りし  
してやつたりと思ひ。ちらりと様子を伺うと、こずえの表情にはど  
きまきしている様子が、まだ、消えていなかつた。嘘のなさを見て  
上総は苦味を覚えた。

一緒に通うでもない、特に変わったことがあつたわけでもなかつた。

上総と美里との『付き合い』はまだ誰も気付いていないようだつた。

土曜日の『音楽室十五分事件』あたりにはみな、興味しんしんの日つきだつたが、一日休みが入るとみな忘れてくれたらしい。

いつものように授業は進み、休み時間には花札をやり、レコードを交換したりなどして、時は過ぎていつた。

誰も気付いていない。

たぶん、秘密はまだばれていない。

心の中にひそひそとする音を聞きながら、上総は朝何気なく美里と顔を合わせ、挨拶を交わした。

「清坂氏、今日の一時間目、茶道の準備には行かなくていいのかな」  
青大附中では毎月三時間ずつ茶道の授業が行われていた。茶室が用意されていて、各学年が一時間ずつ茶を立てたり花をいけたり、茶道の基本動作を学ばされていた。もつともこの時間の楽しみは、和菓子を食べることに及ぶ。毎日のように、老舗和菓子店から運ばれてくる。食べるだけならいいのだが、実技と筆記の試験は勘弁してほしかつた。青大附属にいる以上、ずっと続くことになる。大抵は評議委員と学習委員が準備に出かけて、洗い物をしたり運んだりする。

「そうね、行こうかなあ。あれ? 学習委員の一人はどうに行っちゃつたの?」

「さつき、菱本先生に呼ばれていたよ」

上総は時計で確認した。まだ十分くらい時間があった。

「じゃあ、行つてみようか。用事なくたつて、用があるかどうか確

認するだけでもいいしね」

一緒に教室を出た後、後ろを振り返ると教室が静まり返り、その後笑い声がもれ聞こえた。美里が扉を閉めた後、ぽつりと、「なんだか、みんな、変だよね。そう思わない?」とつぶやいた。

「今の雰囲気か?」

「うまくいえないんだけどね。なんだか居心地、悪くって」美里はゆっくりと上総の隣で、小さい声でささやいた。

「せうだ、昨日こずえに何言われていたの?」

「いつものように、朝のさわやかな寸劇」

すべて聞かれていたことを知っているので、上総も照れずに答えた。

「黙つていないで、文句言えばいいのに。立村くんどうじつも黙つているの?」

「言われている意味がよくわからなかつたから」

上総はとぼけとおした。

「嘘、さつき貴史から聞いたよ。貴史もあきれっていたよ。俺だつたら、一発殴り返すつて」

「大丈夫、ちゃんと次の時間言い返しておいたからさ」

さつそく「羽飛に同じこと聞いてみろ」という言葉を教えてやつた。

「立村くん、意外と残酷な」とするのね。こずえ、本氣で貴史のことが好きなんだよ。かわいそうじやない」

「うん、そう思つ」

言ひ返さず、上総はうなずいた。外靴に履き替え、茶室に向かう細い路地に入つた。

「あれ、あつさり反省しているの?」

「そつ、謝るべきかもしれないな」

短く答えて、上総は周りを見渡した。幸い、誰も居ない。茶室が

少なめの竹やぶに隠れて見え隠れした。昨日の夜に大雨が降ったものの、朝になるとすつきりやんと、しづくだけが笹の葉からすべりおちていた。歩く石畳も黒い土が染み付き、重たい灰色に染まつていた。

「あの時はかなり感情に流されすぎたよな、って思つ」

「立村くんにしては珍しいなとは思つたんだけどね。いつも、言いたいことを飲み込んでしまうでしょ」

「あのさ、清坂氏」

ぐぐり戸を開けて、靴を脱ぎ、誰か居ないかを確認した。まだ用意されていなかつた。先生も居なかつた。どこかで準備しているんじゃないだろうか。上総は背中を丸めてぐぐり、茶室の中を一瞥した。小さい部屋、六畳くらいある。本格的茶室とは程遠いといわれているけれども、飾り付けられているものはみなきちんとしたものばかりだつた。掛け軸も花瓶もまだ用意されていない。ざらざらした床の間には、先週使つた掛け軸が放り出されていた。いつたい六月の季語がなんなかわからぬし、茶会の名前もなんだかわからぬ。ただなんとなく落ち着く。美里もぐぐり、靴をすみに置いた後、膝を抱えて座つた。

「まだ先生来ていなよな」

「荷物取りにいつたんだろうなあ。まあいいか。来るまで待つていようか」

上総も少し間を置いて座つた。片膝だけ立ててざつと見渡した。

「あのや、清坂氏」

「どうしたの」

「古川さんにはまだ、話していなか」

「うん……まだだけど」

「そつか」

「言つていいの?」

美里の表情は逆光のせいか読み取れなかつた。

「別に、隠すことじやないし」

言いつつ上総は目線をそらしていた。

「いや、また、朝が大変になるかな、と思つただけであつて」

「あ、そうだね。立村くんは毎朝「じゅえと」戦えなくちゃいけないんだよね」

くすりと美里は笑つた。ふふつといつかすかな声が聞こえた。

「でもね、「じゅえは貴史一筋だからね。悩んでいるんだよ。ほら、こずえも英語の成績いいじやない。一応、高校は英語科を狙つてゐらしいのよ。立村くんと一緒に」

「高校でも戦いが続くのか？」

「かもね。でも貴史はたぶん普通科で十分だと思つてゐるよ。私もおんなじだけね。本当はこずえも、貴史と同じクラスになりたいから、普通科に行きたがつてゐるんだろうけど、でもね。周りは絶対英語科を勧めているらしいのよ」

「どちらを選んでもいいという贅沢な悩みか。俺みたく英語科しか向いていない、というのではなくて」

「まあね。でもね、たぶん「じゅえは英語科選ぶと思うよ。いくら好きだといつても、自分の将来まで代えられないもんね」

美里が何でそういう話をするのかわからなくて、上総は相槌を打つた。

「まだ先の話だろう。まだ一年生の半ばなんだからさ」

「公立の子とかは、今から受験の話でびりびりしているよ。青大附中のよううに脳天氣で居られるのは、めずらしいことなんだよ」

たしなめられ、上総はいつものように謝つた。

「すみません、清坂氏」

「だからどうして謝るのよ」

怒つた口調で、またぴしゃりと言われてしまつた。

「あのね、立村くん。私、いつも言つてゐるけど、気を遣わなくつていいいんだからね。何か抜けたことがあつたって、いまさら変つたりしないんだから。それにずっと、私、変わつていなんだからね」

美里の言い方には、上総へ何かを訴えたいのに言い切れないものが感じられた。もつとわかりやすい言葉があるはずなのに、口の中に塗りこめてしまい、言えずにしてしまうような感覚だった。

変わつてないわけ、ないだらう。

「あのや、清坂氏、聞いていいか」

「なあに」

「前、付き合つたこと、あるんだらう」

「驚いた顔だけ見たかった。

「え、今、何て言ったのよ」

「だから、前に付き合つたことある奴、いたんだろ」

「何言つているのよー。ちょっと、誰からそんなくだらないこと聞いたのよー。もしかして貴史？」

「あのばか、何考えてこるのよー。いや、話の成り行きでなんとなく聞いただけだからさ。付き合つてこと、わかっているから、いいかなとか思つただけなんだ」

「立村くん、もう一度同じこと言つたら、絶交するからね。いい、全く何言い出すかと思つたらー。もつ、さつさと教室に戻るからー。あわてて上総も立ち上がり、取り繕つつもりで頭を下げた。

「「めん、こんどは本当に悪かつた」

「今度は謝つてもらうのが当然よね。もう、本当に失礼だよー。」

少しだけ離れ、茶道の先生が来るのを待つていた。失言だつたと反省しつつ、美里の方をちらちらとうかがつ。美里も深い目をしながら上総を見返していた。

「あの、さつきは、本当に「めん」。別に変なこと言つてない

「いいよ。立村くんの考えていることなんとなく、わかるかい。それよりも、先生遅いね。このままだと始まつちやうよ」

上総と一緒に小さな茶室に入つてから十分以上は経過しているはずだつた。しゃべつているよりも、なぜか黙つている方が長い時間

のよつに感じられた。茶室に行かねばと思つたのは上総が先だから、言い出しひへの責任は重い。まさか、別の教室ではないだろつか。「まさかと思うんだけどさ、清坂氏、俺たちって、別の教室に行かなくてはならなかつたつてことないだろつか」

「え、だつて立村くんこちらの方に、つて」

「そつ、俺が間違つていた。申しわけない。たぶん、その可能性が高こよ。急いで教室に戻つた方がいいかもしれない」

「あ、でも、待つてよ。だつて茶室を使つていう話は、先週聞いたよ。先生が話していたよ。だつたら、言い訳できるじやない。一応茶碗とひしゃくだけ持つてこいつよ」

「そつか、何やつていたんだつて怒られるのはたまつたもんじやないよ」

適当に、その辺にあつた茶碗を両手で抱え、上総はじじり口へ体をかがませた。が、雨音に思わずぱたんと口を閉めた。

「まずい、雨降り出しているよ。それも大ぶりだ」

「本当ー。どうしよう。雨にねれちゃうね」

美里の方に振り返ると、上総は少し考えた後、思い切つて言つてみた。

「どうせだつたら、今日の茶道はエスケープしようか。はからずしも、雨に閉じ込められましたつてことにしてさ」

「立村くん、それ本気で言つてこりの？」

「なんだか、いくのが面倒になつてきた。今年に入つてからはまだ一度も休んでいないからさ。それに、言い訳も利く。こちらにいるじずつと思つて、掃除をしていたりあつとこつ間に、こんな時間になつてしまつましたつて」

がたがたびしひしと、薄墨色の雲から雨が降り注ぐ。天井に響く雨音は、美里の言葉も聞き取れなくなり、激しかつた。しかたなく上総は側によることにした。

お互ひ、膝でこじり寄り、でも声はそのまま控えめにわせやいた。「見つかったらどうするとか、思はないの？」

「いいよ、たぶん、この時間になつても来ないんだつたら、誰もこないよ」

「いくら話しても声が聞こえないとどうしようもない。身を寄せ合つて膝を抱えて話すしかなかつた。時折、雷が落ちて、がしゃんとどこかにぶつかる音が聞こえた。樹木が真つ二つに割れてしまつた現場に立ち会つたこともある。小さい頃だつたら、泣きながらベッドにもぐりこんでいただらう。恐怖心は残つてゐる。でも美里がいる以上、意地でもみつともないところは見せたくないなかつた。

「あのね、立村くん」

言葉が途切れ、空気がほのかにあたたかく流れた時、美里が思い切つたように顔を上げた。直前に話していた時とは全く違つ。思い切つて打ち明けようしているまなざしに見えた。

「どうした、なにがまことにしたか」

「ううん……あのね、どうして、さつき、あんなこと聞いたの」

「あんなことつて、どんなことだよ」

「私が前、付き合つていた相手、いたつてこと」

「羽飛から聞いたから」

膝をかかえたまま、天井をみあげたまま、答えた。

「あれは勝手に思い込まれているだけなんだよ。立村くん

「別に、そういうのは気にしないけど」

「ううん、そういうことを言いたいんじゃなくつて。私ね、確かに小学校の頃、男子と仲良かつたし、貴史以外にもいい奴とかたくさんいたから、よくつるんで遊んだりしたことあるよ。一年の頃に言われたことあるんだけど、私、三年生の先輩たちから『男出入りが激しい』とか噂されているみたいなんだ。この前頭にきて、本条先輩を通して直接聞いてみたのよ。そうしたら、単に『男子としゃべることがすごく多い』から、だけなんだつて。うちのクラスつて、男女仲いいよね。ふたりでしゃべつても、全然変なこと言われたことないし、たまにからかわれたりしても、すぐわかってくれ

るよね

貴史や「やあえたちにからかわれた」とはあっても、極限まで突き刺すような言葉を投げつけられたことはなかった。話の合間にやわらかくばんそのうひを渡してくれるよひなやさしさが残っていた。上総は頷いた。

「せひ、前、南雲くんが彰子ちゃんに告白した」とあつたでしょ。

『理科室の告白』

「ああ、あれは南雲の玉砕勝負に、奈良岡さんが落とされたつて奴だな」

「もし、今年一年生たちのよひに、男女嫌いあつている中での事件が起つたら、と思つと、やつとしない?」

「南雲たちのためにも、ほんとに今年の学年でよかつたと思つている」

「でしょでしょ。なにげなく誰かがかばつてくれて、何気なくつまくつまくみつけてくれるよひな力が、クラスの中に働いているんだよね。誰がどうつてわけじゃないんだけどな。私が、男子と自然にしゃべるのは、話していく、楽しいから。それだけなのよ。同じくらい、女子とおしゃべりするのも楽しいけど。たぶん、貴史は私が普通に話している男子のことを、なんとなくだけど『付き合つている相手』と思つたんじゃないかな。あいつはほとんど私の過去、知つているけれど、たまに勘違つてするからね」

「羽飛が間違えるなんてこと、あると思うか?」

大親友どうしの美里と貴史である。考えられなかつた。

「あるよ、そりやあ。私だつて貴史が誰に熱上げてゐるかなんて、見当つかないもんね。鈴蘭優くらじやないの」

「わかりやすすぎるな。たしかに」

手を打つて同感した。のどまででかかつた言葉を隠した。

「もしかしたら私は、他の人たちからみて、『付き合ひ』ひとをたくさんたくさん、してきたのかもしれない。そういうわれるのは、も

う覚悟しているの。でもね、私の口から、『付き合つて』って言ったのは、一回だけ

美里はさらつとしたまなざしで、上総の方を見やつた。両手を組んで、膝に重ね、こくんとうつむいた。

清坂美里は男子の間でも人気の高い存在だつた。

他人にあこがれられるよりも自分から相手の方に近づいていく。正しいと思うことを信じて、言いたいことははつきり伝えて、好きなものは好きとはつきり言つ。人の辛い時には、黙つて寄り添つてくれるような暖かさも兼ね備えている。

何度、上総は美里の気遣いに救われたことか。

本人が意識していないから、あえて口にも出さないできた。たわいもないことでは「ありがとう」を繰り返してきたけれど、本当の芯は、まだ一度も口にしたことがなかつた。

一年の冬近い頃だつた。

同じクラスの女子に立村上総が言い寄つて、振られたらしいといふ噂が学年に広まつたことがあつた。

理由は上総も承知していた。

そういう噂を流されてもしかたのないことだと思つていた。

今度こそ、自分はクラスで物笑いになる、そう覚悟していた。D組の男子たちおよび、美里は全くそのことに触れようとしなかつた。教室を出ると散々からかわれるのに、なぜか自分のクラスだけがほわっと包んでくれたようだつた。

もちろん『振つた』とされる女子関係はそれなりのまなざしで上総を眺めていたようだ。

やがてゆつくりと静まつていつた。

何が起こつたのかわからぬまま、年が明けた。上総はその後、本条先輩を通して、美里が女子に對してなんらかのフォローをしてくれたらしいと知つた。。 本当のことがなんなのかは聞けなかつ

た。

何事もなく一年D組の評議委員として認められたのには、美里の存在が大きかつたのも十分過ぎるくらい理解していた。

好きとか嫌いとか、簡単に片付けられない気持ち。

上総がしつこいくらい「感謝している」と繰り返すのは、自分の心に一番近い言葉だからだつた。

入学式の時、どうか今度こそうまくいくことに繰り返し祈りながら、教室に足を踏み入れた時。

初めて羽飛貴史に、罵り声以外の言葉をかけられた時。

初めて美里に話しかけられ、緊張しながらも必死に言葉を探した時。

帰り際、もつと話したい、と言わされて戸惑つた時。

あれから一年以上経つ。

付き合つという言葉で上総は、美里との間を決め付けたくなかつた。

ずっと戸惑いつづけていたのは、きっとそれ。

手をつないだり、写真集でかもし出される妄想を繰り広げたり、抱き合つたり。そんな形に納まつてしまふものではなかつた。

周りから好意的に「付き合つちやえよ」とからかわれる時に感じる不快感。自分がぼろぼろになりそうな時、味方でいてくれた評議委員の女子を『好き』という言葉でいつぱひとからげにしたくなかつた。

「どうしたの、立村くん。気、悪くした？」

「ごめん、俺、やつぱりさつき、ひどいこと聞いたよな」

「もういいから。誤解だけ解ければもう何も言わないから」

手は触れなかつた。間に人がひとり入れるだけの隙間が空いていた。

「もう少し、小ぶりになるまで、ここで待つていようか」

「うん、評議委員が一人ともエスケープしてしまつたなんてね。あ

とで菱本先生に思いつきつ怒鳴りやれやつ

「一緒に怒られにいこつか

「一蓮托生、覚悟しなぐちや

ちやぱちやぱとしたたる兩音が、ちやぱっとこつ音色に変わった頃。

片手に練習用の茶碗ケース五個と、ふくさ十枚をカモフラージュ用に持ち出し、上総はにじり戸から出た。すでに水溜りは石畳の上まで浸していい、靴の先がぬれてしまい、気持ち悪かった。後ろから美里も茶筅を持って付いてきた。かすかにしめつた草の匂いが鼻についた。

「教室にまず行ってみようか。だれもいないかもな」

「なんだか蠶蹙かいそくよね」

うまく泥を踏まぬように、注意深くバランスをとりながら上総は空を見上げた。薄墨の色は雨のしたたりでほんの少し、薄まつたようだつた。

「お前らどこに行つていたんだよ」

教室に入るや否や、貴史の一聲が飛んだ。

すでに三十分以上経過していた。

「俺が悪かった。今日の茶道、茶室じゃなかつたんだよな。準備するものとか持つてきたんだ。教室でやるのかなとつてさ」

「ばあか、お前らがいなくなつてから、すぐに菱本先生が来たんだ。今日は緊急の用事があつて自習なんだつてさ。お前ら運がいいよな。あれつきり他の先生誰もこないからばれてねえよ」

自習。こいつは落ちか。

上総はそつと教室の雰囲気をうかがつた。

男子は一応、といふ風に上総と美里を一瞥し、そしらぬ顔でおしゃべりを続けていた。女子はといふと、やはり美里に手を振り、上総には冷たい視線を投げかける、もしくはくすくすと笑う。

もつとからかい声の激しい奴を想像していたのに、ちよつと拍子抜けした。

ヨリによつて美里と一緒にエスケープ寸前だつたのだ。ひゅうひゅう言わるのは、雨に降り込められた段階で覚悟していた。

「全く、運のいい奴め」

一番、突つ込むだろうと思われた貴史ですら何も言わず、やりかけの花札席に上総を招いた。

「ほら、お前の分、席取つてある」

いつ、壊れるんだろう。

いつ、からかわれるんだろう。

いつ、どうなるんだろう。

授業が終わるまでの間、上総は同じことを考えていた。

別に何が起こったわけでもない。からかわれたわけでもない。全く何も起こらなかつた。

朝は相変わらず、古川こずえとの下ネタ攻撃に対抗策を練り、数学の授業では相変わらずぼけた答えを返して笑われ、英語の授業ではひとりだけ別の副読本を渡されて辞書を引いていたりした。

一部訳知り顔の女子数人が、ひそひそ声で上総の方を見てささやき、笑い合つてゐる。

覚悟していたことだつた。

野郎連中の反応がどこか不自然だ。

あれだけしつこく

「お前は清坂だろ」

とからかつていた連中が、何も言わずに花札の席へ誘つてくれた。あれだけうるさく

「美里とつきあつちゃえよ。好きなくせに」

とささやいていた貴史すら全く美里に関する話題を出さなくなつた。美里から声を掛けられれば、多少なりの話をしているのだろうが、上総に対しては全くといっていいほど、ネタを振らなかつた。

火曜日の茶道室にて美里とふたりつきり、雨宿りをしていただけのことだ。 たいしたことじやない、といえばそれまでだ。

でも、あの時

「雨があがるまで待つていようか

と口にした段階で、上総は覚悟していたはずだつた。教室に戻つてくるなり、さんざん冷やかしの嵐に遭つことを。南雲・奈良岡力ップルの他、一年の頃は貴史と美里もだつた。貴史といづえ、とう時もあつた。男子女子の『つきあい』といつものに変動が起つた場合は、まずからかいの洗礼を受けさせるのが常だつた。なのになぜだらう。決定的な、三十分钟の空白だつたといつのに。誰一人、上総に対して

「お前何していたんだよ。三十分钟あれば、やれるよな」としようもないネタを突つ込んでくる奴はいなかつた。恋愛沙汰に関する話題を持つてくる奴もいなかつた。花札、期末テストの予想、高校の情報、テレビ番組の話。ここまできつぱりと避けられると、かえつて不安だつた。何かがある。

何があつたんだろう。

俺はいつ、どうなるんだろう。

女子以外の噂がないのが、ここまで不安になるとは思わなかつた。

かといつて、貴史に聞くこともできなかつた。

どつぼにはまつてしまつような気がしてならなかつた。

まだ『つきあい』を隠しておかなくてはならないと、美里とは約束したのだから。

帰りの会が終わり、挨拶もそこそこに図書館へ向かつた。本条先輩と待ち合わせていた。木曜日までに用意する、一年生学年集会に関するレポートの感想と、今後の評議委員会について少し話をする予定だつた。

大抵はその後、本条先輩と別の教室でだべることがほとんどだつた。上総が多人数でいるのを好まないことを勘付いてくれたのか。口ではそう見えなくとも、本条先輩の決めこまやかな心遣いに感謝していた。

本条先輩はいなかつた。

三年A組の前を通つて来たけれども、まだ帰りの会は終わつていなうすだつた。

図書館にもいなかつた。

窓際の、誰も座つていない机を我が陣地にしたのち、上総は『グレー・ト・ギャシビー』の新しい訳本を探し、本棚の林をさまよつた。

「あれ、つっちゃん」

声を掛けられ振り向くと、南雲がここにこじながら手を振つていた。

「南雲。図書館にいるなんてめざらしこな」

「そうか？ まあそんなもんだ。お前こそどうしたんだよ」

「評議の関係でちょっと、本条先輩と打ち合わせなんだ」

「あれ、じゃあ、清坂さんはいなかつたのか？」

「いつも一緒でいないとおかしいか？」

とつとつきたきた。上総はあきらめ氣分で答えることにした。

南雲だつて言いたくてならなかつたのだろう。

「そうじやないけどさ。それにしてもさ、夏休みの合宿でそろそろ、委員長に関する内定がでるんだよなあ。俺も胃が痛いよ」

南雲には自分にあつた委員会を選ぶべきだつたのではと言つてやりたかつた。シャギーにそいた髪型で、制服も少々崩し氣味。そんな南雲は一年連続の規律委員である。次期規律委員長に選ばれるのではないかとの噂が流れている。

大抵、委員長候補はどこの委員会でも、夏休みに『教育』と称する精神的じきが行われる。じき、という言葉は悪いが、要是現委員長が、次期委員長に対し過去の経験を語りまくるというユアンスのものだつた。

規律委員会というと、めがねをかけたいやみな優等生の役割と思われているようだが、何のことはない。南雲が言つには、

「意味不明な校則を、学校側に改めるよう交渉するのが仕事であつ

て、守らせる仕事じゃない」

のだそつだ。もちろん遅刻玄関チェックなどはするけれども、大抵大目に見るようにしていいという。青大附中で遅刻を二回すると、チケットが切られてしまい担任との面談が待ち構えている。

南雲は主に、

「お前そろそろちゅうとやばいよ」

と忠告する役割にとどめていた。締め上げているところを上総は一度も見たことがない。

「内定か。もう規律委員のほうは南雲に決まっているようなもんだつて聞いていたよ。どうなるんだらうなあ」

「何言つているんだよ。りつちゃんだつてそつだる。来年の評議委員長はお前で決まりじやないかつて、うちの委員会でももつぱらの噂。本条委員長の懷刀といわれているじやないか」

「誰が言つた、そんなこと。俺は毎日本条先輩に怒られているよ。まさかそんなことあるわけないだり」

本当はわかつていた。

おそらく来年は評議委員長をおおせつかることになるだろつ。

同期の評議委員もみな納得すみだつた。

どうしてかわからぬけれども、

「立村ならば委員長で問題ないんじやないか」

という結論に達したらし。あとは今年の夏休みに行われる委員会合宿で、本条委員長からの内定をいただくのみとなつている。内定式という形ではなく、現委員長がなんらかの方法で伝える。

「ずっと思つていたんだけども、南雲。どうして規律委員会なんて硬いところを選んだんだ？ どうみても、お前、らしくないよ」

「知らないのかな、りつちゃん。規律委員会の外部活動を」  
南雲は相変わらずにこにこしながら続けた。

「規律出身の先輩たちはなぜか、ファッションセンスにうるさい連

中ばかりなんだ。普段制服をチェックすることになっているから、なおさらなんだろうが。だから、暇があれば駅前の洋品店を覗いてファッショ nの研究にいそしむのや。やたらと絵がうまい奴とか、モデル並にスタイルばつぐんの子とかいるだろ」

意味は通じた。

「なるほど、青大附中のファッショ nリーダーってわけか

「その通り。表は先生の言う通り、バッヂをつけるとか、スカートの丈短くしすぎるとか鬱鬱買うこと」言つてゐるけれどな。ちゃんとコニー機を使いまくつて、『青潟大学附屬中学発信ファッショ n通信』を発行してゐるつてわけ。あ、大丈夫だよ。どうせ先生にもばれてゐるんだからさ。ちゃんと職員室にも配つてゐるから

「同人誌作りのようなものか」

「とも、言つた。でもさ、評議だつて同じだろ。文化部の行事をほとんどの網羅している謎の集団だつて言われてゐるし。生徒会よりも、評議委員会の方が力強いといつるのは、かなり怖い現実だよ。先輩たちにも、『評議とはうまくやつておけ』って言われてゐるしな」

「よくわかつた。俺も今の話で、規律委員会とうまくやらなくてはならないことがよくわかつたよ」

「ふうん、なぜ」

手招きして上総は南雲にわざやいた。

「演劇関係の衣装担当として、協力参加つていつの

きよとんとしていた南雲

ゆつくりうなずいた。

「なるほどね、さては去年、相当苦労したと見える」

「『忠臣蔵』なんてやらせる学校、青大附中以外にどこにあるつて

れ」

しばらく南雲とたわいもない話をしつづけていた。たまたまこうやつて別の場所で顔を合わせると、南雲は上総のことを『りつちやん』と呼んだ。

他の連中から大抵苗字を呼び捨てにされていた。

決して名前で呼ばせたことはない。

もし冗談でも声を掛けられたら、一生口を利くもんか、そのくらい徹底していた。

一年持ち上がりのクラスだから、前から話はしていたけれども、たまたま所属するグループが異なったこともあり、親しかったわけではないかった。

貴史はどうも波長が合わなかつたらしいのだ。

おおまかにD組男子は三グループに棲み分けられていた。貴史が中心となつてゐるグループに上総は一応、位置している。南雲のいるグループは隣のC組連中と重なつていて、『規律委員会』の裏活動のごとく、最新ファッショնにつるさい連中が揃つっていた。バンド活動に燃えている奴も混じつてゐるためか、ハードロック関係を愛好する集まりのようにも見えた。

評議委員である立場上、上総はできるだけどのグループにもつかず離れずでいるようにしてゐた。貴史たちのかもし出す雰囲気が嫌いなわけではないが、南雲たちのしゃれつ氣ある集まりもなかなか楽しいものがあつた。ただ、貴史がいい顔をしないこともあり、一年生の頃はそれほどおしゃべりしたわけでもなかつた。

一年に上がつてからだつた。男女同じ委員同士の班構成ではなくなり、単なるぐじ引きで決まるようになり、たまたま上総と南雲は同じ班となつた。評議委員会、規律委員会との次期委員長候補といつこつもあつて、ちょこちょことしゃべることが多くなつた。

南雲の方が上総に、強く好感をもつてくれていたという印象の方が強い。

上総としては、それなりにあわせていた程度だつたのだが、南雲の方が一方的に『りつちゃん』と呼びかけるようになつていつた。もつとも、教室では絶対に苗字のままだ。羽飛貴史との付き合いも考へてのことらしい。

小学校の頃だつたら、ひどいめに合わされてゐたタイプの奴

じゃないか。

最初はそう、危惧していた部分もあった。

慣れていくにつれ上総もだんだんやわらかい話題を増やしていく。奈良岡彰子との恋物語しかり。内面は見せなにようにしていたけれども、南雲にはそこまで言わなくても追求されないです。また納得してくれているような暖かさも見え隠れしていた。貴史や美里とは違った側面のものだった。

そつと心配してくれている、いわば兄、姉のようば部分があるのに対して、南雲の場合は同じ地平で話ができる弾みのようなものがあつた。ボールを投げれば同じ力で跳ね返されてくるような、心地いい弾力。

それゆえだつた。『理科室の告白事件』では、できる限りのことをしようと決めた。

南雲の気持ちも、言われてしまつた奈良岡の気持ちも、理解できわけではない。でも、ひゅうひゅう言われるのもついやだらう。

もし俺だつたら。

「本条先輩、遅いな、まさか忘れて帰つたなんで言わないだらうな」「十分くらい南雲と話をしていたが、本条先輩の来るけはいはなかつた。同じクラスの三年生が図書館をうろうろしているのに、肝心の本条先輩が来ない。上総が一、二分待ち合わせ場所に遅れただけでもどつづくせに、どうしたのだろうか。

「つっちゃんと本条先輩はうまく行つてゐるみたいだな」

「お前のことはそうでもないのか?」

「まあまあ」

言わずに南雲は回りを見渡した。誰かがいるのを注意しているかのようだつた。狼めいたシャギーの髪型が、アイドル歌手に似ているのだそうだ。いつやつてみると、南雲は犬系の動物に似てゐると思つ。

「秘密を聞きたいみたいだな」

「鋭いな。何はともあれ、りつちゃん。今日、クラス妙だと思わなかつたか」

まじめな顔で、鼻をこすりながら南雲は尋ねた。

「いつのクラスのことか？」

「まあもともと、妙なクラスだもんな。りつちゃんも落ち着かなかつたようだし。俺とかにも聞きたいことがあるんじゃないかな、とか思つてさ」

何を言いたいのだらう。上総は、指先を本の間にはさみこみ、その痛みでもつて考えた。果たして自分が今、考えていることと同じなのか、それとも別なのか。うつかり変なことを口にしてしまったら、仲のよい南雲といえどもどつ考へるかわからない。

「たとえばどんな」

「うーん、そりだなあ」

南雲はしづらへ言葉を選んでいよいよすだつた。こめかみをつんづんとつつき、本に目を走らせた後、

「話変わるけど、お前今でも杉浦さんのこと好きなのか  
いきなり関係ない話を持ち出した。

悪夢だつた。思いつきり本に指をはさみこみ、抜いて、紙で指をすつてしまつた。痛くなり、すぐにハンカチを探した。動搖してしまつたのを、南雲に見られてしまつた。

杉浦加奈子。

「なんでこまわり口傷をえぐるよつなこと詮つんだ、南雲」

真冬の悪夢だつた。上総にとつて打ち消してしまいたい記憶の塊が杉浦加奈子だつた。思い出すだけでも本気で泣きそうになる。二重、三重に恥が塗りたくられていつた、冬の日を上総はたぶん、一生忘れないだろつと思つてゐる。冷静に上総は答えた。

「あの頃のことについてはもう、俺は何も答える気はない。皆が思つていてるあたりで、思つてもられればいいから

「ふつん、そつか。皆が思つてゐるところにか

身を乗り出すようにして、南雲はさうに置み掛けた。

「詳しいことは、聞いているだらう。そういう」と

さつと南雲には、自分が同じクラスの女子、杉浦加奈子に告白し玉砕したという話が伝わつてゐるだらう。他のクラス、下手したらい一年、三年の先輩たちにまで知られてしまつたことなのだから、D組の南雲が知らないわけがない。誰もからかわないでくれたのは、今でも謎のまま。でも、覚悟をしていたことだから上総は受け入れていた。加奈子が戸惑つような表情で上総の方を避けるようにしてゐるのも、事実だとみんなが思つてゐる証拠のようになつた。

本当のことを言つ必要は、ないと思つてゐた。

南雲はそんな上総の考えを軽々と読み取つてゐる、そんな顔をした。

上総の感じたボールを上手に跳ね返したまなざしだつた。  
決して痛くないものだつた。

「杉浦さんに惚れた立村が何を考えたか、呼び出して付き合ひをかけてみたのはいいが、杉浦さんには彼氏がいたと。だからあつさり振られてしまつたものの、一度、三度としつこく追いかけたものだから、杉浦さんも困りきつてしまつたと。で、とうとう他の組の女子に助けを求めたと。まあ、俺たちが最初に聞かされた話はそんなもんだつた。確かに、最初はびっくりしたよ。あの立村がなあ、つて。普段りつちゃんつて、女子のこととか関心ないような顔していりしなあ。つて。だから、かなり驚かされたよ

「悪かつたな。なんとでも言えよ」

「で、一時期は女子にも無視されそうになるしな。清坂さんと古川さん、あと彰子さんくらいだつたか。まともに話してくれたのはさ

「自分の相手を名前で呼ぶのはやめろよな」

「お前だつて『清坂氏』つて呼んでいるだろ」

「癖だよ。一年の頃の名残さ」

なんで南雲がいきなり、思い出したくもないことを持ち出したのか。とまどいながらも上総は必死にボールを返した。ずっと屈いた海が、南雲の一聲で荒れ狂う合戦なのだろうか。堤防が切れる寸前の自分がいた。

何かの拍子に泣きじゃくってしまうかもしれない。

小さい頃から上総は『泣き虫』と言われてなぶられてきた。泣かないでいられる自信は正直なかった。一人でいる時以外は絶対に涙をこらえていた自分なのに。みつともないとこ見せたくない。普通に聞こえるぎりぎりの声。上総はゆっくりと答えた。

「でも、それでも、D組の奴は、いい奴だと思えたからそれが救いだよな。地獄を一度覗くと、もつ怖いものなんてないからさ」

「どうしていい奴だと思った？」

口にするのをためらひ、さらにゆっくりとつぶやいた。

「D組の教室では誰も、俺を責めたりしなかったからだ」

「なんで責める必要あるんだ？」

「確かに俺のしていたことは、嫌がられることだったんだろう」

「氣付かなかつた俺もばかだつたから」

「氣付いていないのは別のことだよ、りつちゃん」

南雲はひょいと立ち上がり、ぱかっと笑顔で答えた。

「悪いけど、今言つたこと、少なくともD組の野郎はこれっぽつちも信じていなによ。そう思われてると信じ込んでいたのは、りつちゃんだけだつてことだな。よくもや、今日までだまされていたよな、驚いたよ」

「どういふことだよ、南雲、ちょっと待て」

「あとはみんな、本条さんに話しておいたから、直接聞けよな。とにかく俺が言いたいのは」

ネクタイをゆるめたまま南雲は片手を上げて去り際、

「りつちゃんが思つてゐるよりも、立村上総はいい奴だつてことだ

思わず声をあげそうになり、押さえこむだけの理性は保っていた。上総はしばらく、この学校でめったに呼ばれなかつた、自分の名前の響きを耳に残していた。男とも女ともつかない『かずさ』といつ響きの名。

南雲から発せられるとほ、思わなかつた。

本条先輩が現われたのは、南雲と入れ違いだつた。

あきらかに南雲と本条先輩は何かを隠している。もちろん、「あとはみんな、話しておいたから」

と答えたところをみると、上総に話してもかまわない内容なのには違ひない。

全く先の読めない会話だつた。

規律委員会が『隠れたファッションリーダーの集まり』ということを考えると、同じく洋服のセンスはかなりいい本条先輩が田をつけないわけがないし、評議委員会としてもそれなりの付き合いはあるだろう。しかも次期規律委員長候補というのは、現評議委員長の本条先輩としては積極的に接触したい相手だつたに違ひない。

でもなぜ？

名前を呼ばれた軽いショックから抜け出せないまま、上総は立ち上がつた。頭を下げた。

「さつきまで、規律委員の南雲と話をしていました」  
ぱぞつと、それだけ言った。

「規律委員のくせに、口は規律できないとんでもない奴だな」「悪い奴じやないですよ。ただ、今の話はよくわけがわからなかつた」

上総の言葉遣いが、どことなく投げやりだつたのに気付いたのだろう。本条先輩は銀縁めがねをはずし、生の目で上総を見た。

「何言われたんだ」

「言いたくないです。あとは本条先輩が話してくれるからといつて、去つていきました。さつき、すれ違いました」

「いや、残念ながら」

とぼける気なのだろう。上総はあきらめた。本条先輩に逆らおうとする」と自体が無理だ。むしろ本条先輩の思考回路を自分のもの

にしてしまって、これからどうすればいいかを考えよう、そう思った。

何はともあれ、明日の評議委員会についての予定を確認し、反省点の発表を行うことを決める事になつた。一年生の今後についてとかいろいろ問題は山積みだつた。夏休みの命題についても、顧問の先生にどう要求を提出するかという問題もあり、しばらくは評議委員として話しつづけていた。

「ど、こうことで、あとはなりやさだ。さて立村

「どうどう来ましたか

「ううう出だしの時は大抵、下ネタでつっこまれるのが見え見え

だつた。

「今日で三日目となるが、どうだ、まだ平氣か?」

「何考えてるんですかまつたく」

露骨にいやな顔をしてしまい、すぐに反省した。感情がまだ自分でコントロールできずにいた。

「遠慮なく言えよ。鼻血が出てそつた時もあるんだろ」

「本条先輩じゃあるまいし」

「の前返した、グラビア写真集のことに違いない。

手放して、一人遊びができなくて、眠れぬ夜を過ごしているつているのだろう。全く外れているといえないのが悔しいが、顔に出さなければそれですむ。

「ああ、それともな、もしかしたらお前、本気でなまを知つてているとか」

「なま? なんですかそれ」

本条先輩の言葉は、抽象的概念が多くて戸惑つことがある。委員会の時には論理的に、どうして下ネタの話題になるとぼかすのが上手なのだろう。上総はその辺ついていくのが大変、骨だつた。

「でもなあ、相手がまずかつたな。清坂じゃあ、口説くなんて無理だろう」

「だから、なんでそういう話になるんですか。南雲にしろ本条先輩

にしろ、俺に見えない話題を振るのはやめていただけませんか。ご存知の通り、俺は数学的な部分の能力がかけているんですから。付いていくのが困難だつて、知能テストの時に指摘されています

やはりこれが。

本条先輩につつこまれたら、もう逃げられない。

覚悟しなくてはならない。

清坂という苗字が、本条先輩の口から出てきた段階で、上総はあきらめた。

してやつたりと、本条の表情がやわらぐ。

「俺も無理やり聞くようなことはしたくない。言えることだつたら、立村、お前の方から言つちまえ」

雨音の響きが激しかつた、午前の茶室。

ところどころ本条先輩に質問されながらも、大まかなことだけは話した。

たまたま茶道の授業があると思い込んで、評議委員同士で茶室に向かつたはいいが、茶室には誰もいなかつたということ。

たまたま雨が土砂降りになつたこと。

濡れなかつたので、ほんのひと時だけ雨宿りしたこと。  
でも、誰も何も言わなかつたこと。

「要するに、俺が勘違いして茶室に行かなければこいつことにはならなかつたつてことですよ。幸い、自習だつたからまだ他の組にはばれていませんが、全く面白ないです」

「清坂と、大体三十分くらいふたりだつたのか」

「そんなんに長くないですよ。一十分くらいかな。一瞬の大雨だつたし、すぐにやむだらうと思つたからです。ただまずいなとは、思いました。大抵クラスでなんやかんやからかわれるのが目に見えていますからね」

「一十分あれば、することは一通りできるしなあ」

「だからどうして本条先輩はそういう発想しかできないんですか」「じゃあ聞く。立村、お前は清坂にむらむらっこなかつたのか？嘘を言つなよ」

上総は即答した。

「きません。全く。その辺は本条先輩と違います、女子だから誰でもそういう目で見るなんて決め付けないで下さい」

「じゃあ、立村は清坂のことが好きじゃないんだな」

「だからどうして」

再び言い返そうとした上総を、軽く手で押しとどめた。

「白状しろ。清坂と、何か、あつたな」

上総の表情がすべてを物語っていたのだろう。

押し黙る上総に、本条先輩はしばらくじっとみつめていたが、思い切ったように口を切つた。

「付き合い、かけたのか」

「そういうわけでは、ありません」

「かけられたのか」

黙るしかなかつた。

「清坂だつたらそれはしかねないよなあ。そつか、で、それはいつだ？　あ、そつか、日曜日前であることは確かだな。金曜か、土曜か」

「そんなのどうしてわかりますか」

「だつてな、お前の悩みよつ尋常じゃなかつたぞ。立村。お姉ちゃん本を返すとか言い出すし。何かがあつたとは思つていたが。やはりそつちの関係だらうなあ。もしかして、清坂に迫られたんじやないか。キスしてくださいとか言われて」

「そんなわけないでしょう！　想像力を發揮するのは」自分の相手だけにしてください」

「でも、お前のことだ、キスのしかたも知らないくせに……」

「知識はありますよ。実践経験がないだけです」

「向こうの方があまいに決まっている、なにせ付き合つたことがあるはずだから、そのくらいはあるだらうしな」

「悪いですか」

「別にそれが悪いとは言つていらないだらう。立村。お前ももう少し大人になれよ。要は清坂とふたりになりたくてならなかつたんだろう。だから、茶室に誘つたんだろう」

「だから誘つたんぢやないんです。茶道の授業準備に行つただけなんです。本条さん、何度言えばわかるんですか。確かに、そういう話が出たのはあります。でも、何でいきなりそんな話まで進めてしまうんですか。第一、付き合つ、付き合わないつて一体なんなんですか。本条先輩」

とうとう堤防が崩れた。涙の代わりに自分が饒舌になるのがわかる。

まだ、何も始まつていないので。

たまたま『つきあつちやおうか』という言葉を受け止めただけなのに。

『つきあつ』といつ言葉がいやだつた。

ずつと田を背けてきていた。

本条先輩のような付き合いなんて絶対に出来ないと思つていた。そのくせ、裏側では写真集の少女を恋しく思う自分を見る。

美里にそういうことを感じたことはない。それはそうだけじ、もし写真集の少女に向ける激しい感情を向けてしまつたら、もう自分は理想の自分でいられなくなりそうだった。茶室でいきなり抱きついてしまつような人間には絶対になりたくなかった。

すべてがつながる、『つきあつ』という言葉。

囁み碎いて、吐き出してしまったかった。

あまりにも苦かった。でもそれができなくて、さらに迷つ。

美里の好意を素直に受け止めたくて、震えている自分もいる。

受け止めたとたん、すぐに「やりたい」「抱きたい」と感じてしまう自分がいる。そんな自分を遠ざけたかった。

「あのなあ、立村、勘違いしてないか。付き合つひつひつのはなまくしたてた後、脱力してうつむいた上総に、本条先輩はしばらく間を取つた。

「何もすべきなことしたりする」とじゃないんだからや。もちろん、俺とかは『つきあつ』という言葉のセットに、すべてオプションとして入れていいよ。でもな、何もお前がそれを最初つから意識して、逃げることはないだろうよ。ぶっちゃけた話、相手は清坂だる。もう、入学した時から『つきあつて』いるようなもんだる。お前がどう考えているかはわからぬけどさ。一緒に歩いたり、しゃべったり、いろいろあつただろ。で、たまたま、清坂が気付いて、『つきあつて』といつてくれたと。別に今までどおりの感じでも変じやないだろ」

「じゃあ、なぜいろいろ騒がれなくちゃいけないんですか。その辺も俺にはよくわかりません。今までどおりでいいならばなおさらでしょう」

「それはオプションが必要だつたからだ。でも今の話聞いていると、清坂もお前も、まだ標準設備で十分みたいだしな」

自然と手がこわばつてくる。上総は唇をかみ締めた。

「ただ、な。俺が思うに。付き合つてすることは早いうちに白状しておいた方が楽だと思つ。これは俺の経験上言えることだ。特に清坂は、俺たちの代で非常に人気があるから、狙つている奴がいないとも限らない。それにお前も、早いうちにけしておきたい、過去があるだろ?」

「思い出したくない」とを、先輩も思い出せようとするんですか」「いまいましい。杉浦加奈子との玉碎告白事件を、本条先輩も持ち出さうとする。

「事実の方が嘘よりも説得力がある。いやな、ちつとも南雲と話していく、やつと納得した。やつぱりお前、早いうちに清坂と付き合つて、例の噂を帳消しにしたほうがいいと思つ。じつせ、嘘は本当のこと負けるんだからさ」

南雲の口にした言葉と重なつていつた。だんだん耳の奥からすうつと響いていく音が聞こえていく。上総は南雲と話していた時以上に低く、つぶやいた。「じつにうつことですか、その嘘つていうのは」

「好きでもない女子に、してもいい『玉碎告白話』なんて、消しちまえ」

ポケットからかたかたと、カセットテープを取り出した。

「あとはこのテープを聞いて、お前の身の周りがどういうことになつていいかを、よく確認するんだな。本当にお前、ガキだよ。ガキだから、守られていいんだよ」

最高に『抽象的』な言葉を残した後、本条先輩は立ち上がつた。「行くぞ、立村。ちゃんとカセットレコーダーも用意してある」

カセットテープを急いでポケットにつつこむと、上総は急いで立ち上がつた。白い羽織のジャケットだった。外はだんだん薄墨色の闇が濃くなつていた。

自転車で急いで帰らなくてはならない、急ぐ心と同時にカセットテープの箱が重く感じられた。からからと音がする。何かがせかしている。そんな気がした。

本条先輩とは、自転車置き場で別れた。

小型のカセットレコーダーをぽんと渡してくれた。

「明日、委員会の時返せよ」

はいとも答えられずに、上総はうなずき見送つた。

雲の裾が銀色に染まり、やがてひたひたと生ぬるい空気が広がつていいく。

自転車に乗つている時は風で溶かされているせいか気付かず、にいふけれども、信号で止まつたりした合間に、じわりと汗がにじんできたりする。

品山に帰るまでには、まだかかるだろう。

空は、持ちそうになかった。

携帯傘も今日は持つてこなかった。

自転車で走るほうが楽だから、当然といえば当然なのが。もし駅前近辺にいるのだったら、本屋に立ち寄つたりするのだろう。上総の知つている町並は田に入っていた。中途半端な知り合いの多い道だった。近くにはファーストフードの店も見えるけれど、雨宿りはしたくなかった。小学校時代の知り合いがないとも限らない。別に自分が悪いことをしているわけではないけれども、できる限り顔を合わせたくない連中がいるのも確かだった。

上総は見渡した後、自転車を降りた。同時に雨粒らしきものがぽつりと頬にかかった。見上げた拍子に雲の全身は黒い銀色に染まり降り注いできた。

夕立だった。

通りすがりの人々も急ぎ早に軒下を探して走つていた。集まつた場所は近くの、バス停留所だった。半そで姿の高校生、中学生がみな、ばたばたと雨のしのげる場所を見つけてもぐりこんでいた。急いで上総も自転車をひきずつてもぐりこんだ。舗装されているのはバス道路だけ、田の前に広がっているのは、まだ放置されたままの住宅地だった。まだ青々とした叢が、道路越しに広がり、お辞儀をしていた。ばさばさと打ち付けられるような音をさせている雨。雷が落ちないといいけどな、ぽつりとそうつぶやいた。

ポケットにつつこんだままのカセットテープを取り出した。

時間つぶしに、というふうに、カセットレコーダーにはめ込んだ。目線を道路越しに向けたまま、上総はイヤホンをつけて、再生ボタンを探つた。間違つて録音ボタンを幼いように、指先で確認しながら、でも見ないように。

じいじいと響く雑音に混じり、声が聞こえた。

カセットテープの中では、ふたりの声だけが、はつきりと聞き取れた。

雨の音にも消えずに、聞こえてきた。

本条先輩と南雲のふたりがたりだつた。

「……要するに、うちのクラス、つまり一年D組は誰が仕切つていかというと、本当は立村なんですよ。りつちゃん。絶対そうなんです。ただ、行動したり発言したりするのは羽飛なんですよ。立村がああしたらどうだ、こうしたらうまく行くとか言つていろいろ考えてくれているんですけど、じゃあこうしよう、と言つて片付けようとするのが羽飛。あの一人は馬が合いますから、役割分担はうまくいつているんでしょう。きっと。でも、本条先輩、ここからが重要なんですが、D組で立村の存在感は薄すぎます。真面目だし、いい奴だから野郎はみな納得していますけれど、女子がなあ。いまひとつなんですよ」

「あいつが女子受けしないのはそういうことか。で、不幸な失恋ばかりしているつてわけか、なるほどね」

「なんすか、その不幸な失恋つて」

「有名な話だろ？、D組のおとなしそうな子に立村が手を出してこつひどく振られたつて。何血迷ったのかわからんが」

「ああ、杉浦のことですか。あれはちょっとばかし、立村が不幸すぎますね。話そのものがあまりにも捻じ曲げられていますからね。どうしてあいつは自分で言ひ返さないんだろうと思ひますよ。全く

のでたらめなんだか」

南雲は杉浦加奈子のことを『杉浦』と呼び捨てにしている。女子受けするタイプの南雲はみな、丁寧に「せん」つけをしているところだ。

どうして南雲がD組の状況を本条先輩に説明しているのだが。雨音と一緒に振るわせて、心に落とし込んだ。

「あくまでも羽飛の話を信じればですがね。立村はたまたま杉浦の関係で何かがあつて、それ以来ひどい嫌がらせを受けているらしいことです。詳しいことは知りませんが、女子がなぜ野郎にそういうことをしようとするのかが俺にはとんと理解できません。こういう問題こそ、規律委員会の出番なんでしょうが。なにせ、証拠がないまんからね」

「単に惚れて振られて追いかけてつて話じゃないのか」

「あいつが好きな女子を追いかけて口説いてさらに追いかけるなんてこと、するように見えないし。いくら人は見かけによらないとはいえ」

「実践している南雲の言葉は確かに重い」

「杉浦も顔に似合わず汚い女だと思いましたね。俺は女子にルックスを求めるなくなり一ヶ月になりますが、とにかくやり方が汚いですよ。なにが、『立村くんにしつこく迫られている』だつて。C組の女子を固めていって、そこからD組に情報を流して、最後に菱本先生に話を持つていって方法を取つたらしいです。あいつ、相当ひどく絞られていましたよ」

「濡れ衣つて奴だな」

「だからどうして言わないんだろうと思いませんね。腹が立つたら言つてしまえばいいの」と思つけれど、その辺が立村の立村であるべきところでしょう。結局噂はあつという間に消えましたからね。ただ、女子にひどい目で見られるようになつたのは確かです

どうして南雲はそこまで知っているのだろうか。

確かに、南雲の言葉に嘘はなかった。

杉浦加奈子から流されたテーマを、黙つて受け止めてきた。

よく知らない女子たちから、

「なんで立村くんがそんなことするわけ？」

「いやがる女子を追いかけるなんて最低だわ」

と陰口を叩かれても、菱本先生に呼び出されて厳しく叱られても、上総は言い返さなかつた。認めもしなかつた代わり、言い訳も抗議もしなかつた。

クラスで再びいたぶられるはめになつてもいいと思つていた。小学校時代、自分を傷つけてきた連中に頭を下げるくらいだつたら、もう一度一人ぼっちになつてもかまわない。覚悟はできていた。

「お前らじやあ、どうして本当のことを知ることができたんだ？」  
その杉浦つて子は、頭の切れるタイプらしいし、野郎たちもあつさ  
りだまされてもおかしくなかつただろうしな

「本条先輩、年下だからつて見ぐびるのはやめましょ。つまり  
ですね、俺たちはその話が出た段階で、立村という奴の性格を大体  
把握していたわけなんです。何かあつたらすぐに自分の中にしまい  
こんでしまう、自分がまんすればすべてことがすむとわかればあ  
きらめる。とにかく人のことばかり気を遣つてゐる。まあ並べれば  
そんなことですよ。自分のすることをうまく隠して、相手にみんな  
手柄を譲るようなところがあるんです。物笑いにしたいと思つ、タ  
イプの人間ではないですよ。たぶん立村じやない奴だつたとしても、  
うちのクラスは味方になつてやろうと思つでしようよ」

「なんて、麗しいクラスなんだ！　ある意味、怖いところもあるな  
あ

「いや、これ本気で。うちのクラスつて男子に関しては妙に団結力  
がありますよ。女子はどうかわからんが。普段だつたら立村が自分

で采配を振るつて、ある程度の手回しをするんでしょうが、今回は自分のことですからねえ。あきらめていたんだと思いますよ。それでさつそく、羽飛が女子の方からいろいろ詳しい話を聞きだして、俺たちにこゝそり教えてくれたんですよ。連絡網を使うんですよ。

俺たちの場合

「連絡網、なあ」

「だいたい状況が判明したので、羽飛が仕切ることになり、『このことは全くのでたらめだけど、噂は消せないから、俺たちだけでも立村の味方になつてやるつか』という結論に達したと」

「おい、誰かその杉浦とかをつぶそうとかは思わなかつたのか」

「それはなかつたですね、女子に噛み付くようなことは誰も考えなかつたし、第一に羽飛の考え方として、『立村には内緒にしておかなくてはならない』つていうのがあつたようですから。かえつて気を遣わせてしまうといふことだつたみたいですよ。いやあ、うちのクラスに限つて言えば、緘口令ぴつちりでしたね。あいつ、たぶん今でもそういうことがあつたなんて知らないんじゃないんですか」

羽飛がなぜ。

髪の毛から滴る雨。

上総は額をぬぐつた。冷たい水滴が、手の甲に染み入つた。

「ただね、本条先輩。こゝからが本音なんですがね。俺が思うに羽飛のやり方はあまりにも、あまりじゃないかという気がするんですよ。だつて、立村は自分の情けない過去が、俺たちの組の連中にばれればだと思ひ込んでいるわけなんですよ。俺がもし、あの立場だったら、地獄だと思うだろうなあ、つて思いますし。まあ、最近も自分で経験しましたからね」

「ああ、『理科実験室の告白事件』……」

「笑つてやつてください。まあやつたことは後悔していませんよ。惚れた相手がたまたま一般受けしない相手だつたつてこともまずか

つたんでしょうけどね。言つたことよりも、ばれたことの方がショックでしたよ。相手は混乱しちまうし、誤解曲解されるし。でも、立村が……、そうそう、立村と同じ班なんでしょうべるんですけどね。『一番いい形になるようにするから』って言つてくれたんですよ

「これだけか?」

「そう、それだけですよ。たぶんあいつのことだから裏でいろいろ女子に手を回してくれたりしたんだろうなあ。彰子さんからあとで聞きました。とにかく、俺がいかに真面目で規律委員の誇りのような人間であるかどうかを、うちのクラスの野郎がみな、切々と伝えてくれたらしいです。恥ずかしくなりますわな。もともと見た目が俺、こうですから、本気では受け取つてもらえませんから。とにかく立村のおかげで俺は両思いになれたつてわけです。あ、本条さん、これは俺だけの話ぢやないですよ。うちのクラスの場合、他人の恋路は応援するという『紳士であれ、淑女であれ』という校訓が徹底して生かされていますからね」

「つひやましい、俺なんて『近寄るだけで妊娠するぞ』と言われている。失礼な」

「本条先輩くらゐ遊び人だからしようがないでしちう」

「ずいぶん南雲も本条先輩に言つてているものだ。  
さすがにここまで言い放つ自信はない。」

思わず早回しボタンを押してしまいたくなつた。

「でも、これが誰も知らない場所で行われていたとしたら、不気味でしようなあ。俺はいやですね。どんなに善意であったとしても。だからこそ、俺は羽飛の親友ぶつたやり方にむかつてしまつたわけなんです。確かに仲はいいだろうし、それなりに知つていることもあるんでしょう。立村の性格もよくわかっているからでしょう。でもなあ、一言くらい言つたつていいんじゃないかと思いますよ。俺たちはお前の味方だつて。でないと、あいつのことだ、ずっと杉

浦への告白事件を引きずることになってしましますよ」

「いまだに、委員会内でも本当のことだと思っている連中が多いからなあ」

「たぶん他のクラスも、そのことはまだ事実だと思つていますよ。D組だけでうまくいかせるよりも、はつきりと杉浦を告発した方がずっと、ためになると思いますよ」

「確かに、でも証拠がないんだろ」

「そう。肝心要の立村が言い訳しないからです。無理でしょ。ただ、どうにか自分が起こつていてるかくらいは知りたいと思いますよ。うーん、だから、俺は羽飛のやりかたを見ているといつも頭にくるんですよ。いかにも親友面したやりかたっていうのがね。自分を犠牲にしているような顔つきして、俺たちに強要するつていうんですか。だから俺も今回は思いましたよ。また似たようなことがあつたら、立村にすべて教えてやろうってね。ずっと生ぬるい感じで、自分を恥じづけなくてはならない立村の気持ちが、なんとなく、俺にはわかるんですよね。羽飛は気付いていないかも知れないけれど、やはり経験者としては、辛いっすよ」

「で、似たようなことが、最近起つたといつわけか」

「そうです、さつき話した、例の『茶道授業謎の空白一十分事件』です。土曜にも立村と清坂さんは、音楽室で十五分くらい時間つぶしていましたから、みな影でいろいろ噂はしていました。もともとあの二人、できているという噂、前からありましたからね。ただ、例の杉浦疑惑があつた関係で立村も言えずにいるんじゃないとか、羽飛のことも絡んでいるから気を遣つてているんではないかとか。立村が清坂をむちやくちや意識していた様子なのは、見え見えでしたよ。りつちゃんは隠していただろうけれど。決定打が月曜日です。

茶道の授業の準備で出かけたと本人は言い訳していましたよ。手にはふくさとか、茶碗とか抱えていましたから。本当にそうだったかもしれません。でもまあ、俺たちとしてはこの辺での二人をハッピーエンドにしてやつた方が、いいんじゃないかという結論に達し

たわけです

「思いやりのありすぎるクラスだな。普通だったら思いつきりからかいまくつてやるんだが」

「立村の性格でしょうね。あまりしつこくしてしまうと、自分で自分をだめにしてしまいそうな感じなんですよ。それ、羽飛もそう思つていたみたいですよ。一年から一年にかけて、立村に世話をかけてしまつた連中が、うちのクラスほとんどですからね。この辺で恩返しといつたら変ですが、『あつたかく』見守つてやろうか、という話を、茶道の自習中にしていました。男子に関してはその辺、誰も反論はなかつたです。ただ、女子は妙な顔していましたが。杉浦を追い掛け回していたら今度は、清坂さんを狙うなんてなんて女つたらしなんだろ?という感じなんでしょうね。なんとなく、女子は清坂さんと羽飛をくつつけたがつてている目線だつたしなあ

「それは自然の反応だろ?俺もあの一人は出来ていて疑わなかつたが

「ですよね、本条さん、俺もそう思います。だからなんだよなあ、俺、しつこく羽飛の悪口話していますよね。『自分が惚れている女子を親友に譲つて酔つている』ような態度つていうんですか、それがなあ、どうしようもなくいやだつたんですよ。で、今回もやはり、土曜の夜に連絡網が回つてきました。羽飛発ということで、『例のことしばらく内緒にしよう』とかいう話でした。別にそれはいいですよ。自然にばれるだろ?し。でもな、なんで羽飛がそこまで仕切りたがるんだか。俺がりつちゃんを信頼できるところは、前もって俺に一言、声をかけてくれたからなんです。あいつはそうですね、影でこつそり仕切ることはしない奴ですね。影でこそそこやられる辛さの方をよく知つてているんだと思います。でも、羽飛の場合は、自分に対しても異様なまでに自信があるんでしょうね。立村には内緒にしろの一点張り。女らしい奴だとか言つていてるくせに、お前の方こそ、女子とおんなじじゃねえかと、思いますよ。どうでしょう。本条さん」

雨は小ぶりになつたとはい、まだしづくの縦線が消えなかつた。遠方にて落雷が聞こえる。思わず身を震わせる。金属なんて持つていないうちうか。カセジトレコーダーを止めよつとしたが、やめた。額のしめつた前髪を、そのままにして空を軽く、見上げた。田に冷気がすうつと入つていて、奥を乾かしていのよつた感じだつた。

「南雲、それは意見が分かれるところだから俺は何も言わない。羽飛のように秘密を隠すことが正しいとするか、お前のように相手に話したほうがいいとするか、なんともいえない。ただ、今の話からすると、杉浦との玉碎告白事件だけは早く教えてやつた方がいい、氣はする。ここで相談なんだが、南雲」

「なんすか、本条さん」

「この話を俺から立村に伝えておくつてこいつのはどうだ。たぶん、あいつのことだ。同級生からそつこいつを聞かされたら、理性がぶつとんで何をしでかすかわからない。羽飛と喧嘩しないとも限らない。あいつは本当に、怒らせたら何をしでかすかわからないからな」

「そうですね、俺たちよりも、本条さんの方が立村とは親しいだろうから」

「それと、清坂とのことは、もう無理に隠さなくたつていいだろ。どうせお前ら、立村をからかつた時、杉浦のことを打ち消させるようなつもりで、『お前は清坂だろ』とか言つていたんだからさ」「あ……ばれていました？」

「あたりまえだ。普通だつたら、杉浦関係のことでもつと引っ搔き回してやつておかしくないだろ。それを、ずっとお前ら、立村と清坂をくつつけよつとしていたんだからな。無意識かもしれないが、それがお前らなりの、立村への友情表現だつたんだろうな」「意識していますよ。俺に関しては断言します。羽飛のやり方にむかつつきつつも、俺たちは、こちらが眞実だと思つたら当然そちらを

弁護しますよ。すでに杉浦の本性はいろいろなところでばれていましたしね。D組の男子では、杉浦を要注意の女子だと認識しています。最低な女だと思います。もちろんいまさらいじめるなんてことはしませんよ。それこそ『紳士』として、知らないふりをしつづけます。ただ、何かあつても、俺たちは無視しますね。捷を破つた奴を、俺たちは許せません。男女関係なく。ところで本条さん、今日の話つて、『規律委員会と評議委員会』の今後についてのレクチャーでしたよね、どうして、いきなり立村のこと……」

ばちんと、録音の終わる音が入つて、そのあとは静かな雑音が流れていった。

約十分程度のしゃべりだつただろうか。

一方的な南雲の語りだつた。

からつとした言い方の中に、憤る言葉の数々が耳に残つていた。羽飛貴史への感情は、隠すところがどこにもなかつた。

南雲も自分を紳士として意識しているのか、表立つて喧嘩を売ろうとはしていない。きちんと、クラスメートとしての付き合いをしている。でも、本心がここまで煮え立つては思わなかつた。しかも、自分の恋愛沙汰でないのになぜ、憤るのだろう。

羽飛貴史と清坂美里との間に流れる何かを、感じ取つてしまつたのだろう。

自分がだけが一年の頃から感じてきた、ふたりへの違和感はそこだつた。絶対にふたりには割り込めない、恋とも友情ともつかないつながり。『つきあう』という言葉では終わらない美里と貴史に手を触れるのは失礼だと思っていた。触れる気もなかつた。

貴史が懸命に美里とくつつけようとしているのも、まわりが

「お前は清坂だろ」

とあつさり認めているのも、南雲のいつ通りと考えれば意味は通じた。

精一杯尽くしてきたことが、D組の男子にだけは伝わつたとい

う」と。

話しても無駄だと決め付けていたのに、上総が望んでいる以上に、精一杯気持ちを汲み取らうとしてくれていたことだと。

羽飛、南雲。

上総は手を差し伸べて、雨粒を受けた。一瞬のどしゃぶりは落ち着いたけれども、まだ袖口がべたりと重くなりそうな粒の重さを感じた。遠くに見える山の上には、白いガスがかかり、裾根まで広がっていた。

十分、今日は、ぬれて帰ることができる。

びしょぬれになつて、髪の毛をぬらして帰ることができる。  
頬にかかった雨をそのままにして帰ることができる。

自転車のロックをはずし、上総はゆっくりと自転車を引き始めた。首筋に流れるしづくが張り付いたようで、気持ち悪かつた。前髪からしづくがまたぽつりと目の中に入った。何かの拍子でそれが目から涙になりそうだった。田尻にも、唇にも滴る冷たいしづくをそのままに、空を見上げ歩き続けた。

あと、十五分。流れるままでいい。

次から次へと、上総の瞳に雨は降り注いでいた。

鬼門の六月だつてこいつに。

身体を冷やして家に帰つた上総は熱で眠れぬ一夜を明かした。だるいのと寒気が走るのと。

外は白い光が空に薄く広がるすつきりした天氣なのに。身体を起こすことができなかつた。

時間が勝手に流れゆき、気が付けば八時過ぎだつた。もう、どんなに自転車を転がした間に合わないだらう。父が家の中にいたならば学校に欠席の連絡を頼んだのだらうが、とつぐの昔に出勤してしまつた。

学校では無断欠席と思われるかもしれない。

ひつひつ見える夢の中で、何度も響いた南雲の言葉。

「何かあつたらすぐ自分の中にしまいこんでしまひ、自分でがまんすればすべてことがすむとわかればあきらめる。とにかく人のことばかり気を遣つてゐる。まあ並べればそんなことですよ。自分のすることをうまく隠して、相手にみんな手柄を譲るようなところがあるんですよ。」

わんわん響いた。何度も身をよじつた。

思わず枕に噛み付いた。歯軋りしながら頭を打ち付けた。

「でもなあ、一言くらひ言ひたつていいんぢやないかと思ひますよ。俺たちはお前の味方だつて。でないと、あいつのことだ、ずっと杉浦への告白事件を引きずる」とになつてしまふよ」

杉浦加奈子から流された玉碎告白事件の「テーマ」。いや、「テーマ」というには真実味がありました。彼女の「言ひ」ことは正しいこと、重々承知していました。

小学校時代に『ちよつと荒っぽいやりかた』で『仲良くしよつ』と近づいてきた男子に『決闘』を申し込んだことがあった。頭を思いつきり叩かれることが、友情表現だとどうしても思えなかつた。

かばんをかくされたり、掃除道具入れの中に閉じ込められたりすることも、そいつは『ゲーム』のひとつだと言つた。

でも上総にはどうしてもそう思えなかつた。  
そいつの言つたことが正しいのだろう。

誰も上総の味方にはなつてくれなかつたような気がした。  
自分の感じ方がおかしいという自覚はないわけでは、決してない。  
それでも上総は証明したかった。

男子同士、一対一で勝負をつけ、潔くけりをつける方法はひとつしかなかつた。担任のいる前で、さりげなく相手の筆箱をわざと落とすこと。手袋を投げつけるのと同じ由来だろつ。いつしか『筆箱落とし』は、一対一の『決闘』申し込み手段となつていた。もちろん担任に、その意味はわからない。あえて大人がいる前で、にこだわるのはその場でそれぞれの仲間が手出しするのを避けるためなのだそうだ。

卒業式一週間前、上総はそいつのカンペンケースを片手でゆつくりつかみ、ぱらりと落とした。散らばつたシャープペンシル、消しゴム、定規を一切拾わずにそのまま自分の席に坐つた。

意味を知つている男子たちが息を飲み、やがてざわめき立つた。

「まさかかよ」

「附属受かつたから、頭おかしくなつちまつたんじやねえの、泣き虫が」

耳たぶが熱くなり、心臓が跳ねあがりそうだつたけれども、上総は知らぬ存ぜぬで真っ正面を見つめていた。

それからの一週間は、男子、一部の女子の視線を痛いほど感じた。幸い決闘相手は上総が思つていた以上に紳士的な態度で『決闘』に望んでくれた。意外にも腕力ではなく、土手での自転車勝負をしようという旨の申し出を受けた。サイクリングロード沿いの坂お互い、自転車をぶつけ合い、どちらが先に落ちるかを競う、他愛のないものだった。

一年前だから、『他愛もない』と言えるけれどあの時は真剣だった。

卒業式が終り、黒いトンビのコートを羽織つたまま上総は精一杯チューニングした銀色の自転車を引き出し、決闘に望んだ。

もし、ここで騒ぎを起こしたことがわかつたら、青大附中の合格が取り消されることも、カンペ恩ケースを落とした段階で覚悟していた。

なぜか負けることだけは、想像していなかつた。

結果、誰にもばれずに決着をつけた。

計算違いだつたのは、そいつを突き落とした瞬間に想像以上の怪我を負わせてしまつたらしいということ、相手の態度が最後まで紳士であつたことだつた。見下ろした後、家に戻つた後、いつ学校から連絡がくるか、いつ警察から連絡が入るか。電話をずっと見つめていた。鳴らない電話は、最後まで静かなままだつた。

相手は、決闘の捷通り、一言ももらさなかつたらしい。

無事に青大附中の入学式に参列できたのは決闘相手のおかげとも言えた。

まさか決闘相手の恋人が、同じD組で待ち受けているとは思わなかつた

「立村くん、浜野くんって知っている？ 彼が立村くんによろしくですって。立村くん、小学校の頃、とっても泣き虫だったんですよ」

て

聞いた瞬間、ふらついて転びそうになつた。  
身体にも響きが残つた。

杉浦加奈子は真つ正面から上総を見据え、やわらかく言った。

「それも彼が懸命に立村くんを仲間に入れてあげよつとしたからな  
のよ」

そうなのかもしれない。

理解できなかつた上総が悪いのかもしれない。

謝ることも何度も考えた。

でも、叩かれた時の痛みは本当だつた。  
鍵をかけられて出られなくて泣きじやくりながら叫んだ時の恐怖  
もいまだに消えていない。

かばんがなくなつて、夕方遅くまで学校の中をひとり捜し歩いた  
ときの心細さも忘れられない。

泣き過ぎると、いくら声を出しても涙が出なくなり涙腺らしいと  
ころが乾いてだんだん痛くなるといつとも、経験した。

必死に青大附中を目指し念願の合格を果たした時ですらも、杉浦  
の彼氏には一言、

「青大附中には、俺の知り合いがたくさんいるんだからな、逃げら  
れると思うなよ」

投げつけられた時、上総は覚悟を決めた。

殺したつていい。

死んだつていい。

こいつを決闘で倒して、小学校から縁を切つてやる。もちろん杉浦にはそのことを話さなかつた。どんなに説明したところで、上総の感じた痛みを理解させるとはできないだろう。わかつてもらおうとも思わなかつた。

杉浦加奈子が出した条件は、

「私の彼に、土下座して謝つてほしいの。立村くんが勘違いして自分のことを行じめられていたと思っていた逆恨みを反省してほしいの。決闘で彼を土手から突き飛ばして大けがさせたことを、ざんげしてほしいの。」

謝つてすむものだつたらいくらでも頭を下げられる。やつと青大附中で認められてきたといふのに、すべてがご破算になるくらいだつたらと思つたこともあつた。でも上総にとつて、杉浦の彼氏と勝負した『卒業式の決闘』は、上総が六年間のつけ唯一勝つことのできた、瞬間だつた。

「 いまだ後悔したことはない。

たとえ、青大附中の合格が取り消しになつたとしても絶対上総は、悔いないだろう。どんなことがあつても、あの時感じた感情だけは本物だつた。

一年の十一月末。

上総と杉浦は最後の話し合いを行つた。

本品山中学のグラウンドでだつた。

もし青大附属入試をしくじつてしていたとしたら、通わざるを得なかつた学校だつた。

「彼にあやまつてくれるのかしら。それとも……」

穏やかな笑顔で杉浦加奈子は上総に尋ねた。

最終通告というのに、言葉に反してあどけない笑顔だった。ゆつくりと息を吸い、上総は目をそらせたまま言い切った。

「杉浦さんの言つのも正しいと思う。確かに俺は、敏感に感じすぎていただけなのかもしれない。でも、あの時のことだけは、うそだといいたくない。だから、言いたければ言えればいい。もう、俺はD組で受け入れられなくなる覚悟はしているから。杉浦さんが正しいと思ったことを、すればいい。俺はそれをすべて受け入れるから」「そうなの、わかったわ。それならば、あとは私が正しいと思うことをするわ。ごめんなさいね」

やわらかい笑顔で杉浦加奈子は恋人のもとへかけていった。バラック屋根の、体育道具をまとめた小屋で上総はしばらく座り込んでいた。

これからどうなるのかわからなかつた。

誰もいなくなつた後、何を感じていたのか、それすら覚えていかつた。

表に出た時、今度は清坂美里がしゃがみこんでいるのを見つけてしまつた。

万事休す、の意味が、初めて分かつたような気がした。

自分がすべて悪いんだ。

俺が結局、青大附中の評議委員になれる器じゃないってことを隠していたから、こういう結末になつてしまつたんだ。

結局自分が悪いんだ。人が友達になろうとして気を遣つてくれたことすら、理解できない俺がばかなんだ。すべては俺の感じ方が狂っているせいなんだ。

それでいて謝れない情けない人間なんだ。自分が間違っていることを認められなくせに、杉浦さんが言うのが正しいと、わから

つていてゐるべせに。

「立村くん、加奈子ちゃんに振られちゃったね」

杉浦加奈子を追い掛け回していたように見えたのだらう。それでもかまわなかつた。

自分が物笑いにされてばかりいた泣き虫だったことを知られるよりは、杉本加奈子に惚れぬいて追い掛け回している情けない奴の方が、ずっと救われていた。

本当は頭を下げれば一番よかつたのかかもしれない。もしくは本当のことを貴史や美里に打ち明けて、協力を頼めばよかつたのかもしれない。

やつと青大附中の評議委員として認められ、男子からは純粋な信頼をもらい、いじめられるなんて縁のない世界に入ることができたのに。

泣き虫でちよつとしたことで落ち込み、口が利けなくなってしまい、唇をかみ締める小学生だった自分を知られたらどうなることだらう。

想像するのも怖かつた。

美里も貴史も変わることなく、上総を仲間として認めてくれていたのが救いだつた。

それから一週間後。

覚悟していた噂が流れてきた。

「立村くんが杉浦さんに告白して、振られたのに、いまだに追いかけてきて加奈子ちゃん悩んでしまつていいらしいよ」

C組経由でD組に流れてきた情報だつた。

女子が心なしかよそよそしくなつたのは感じた。杉浦も表面上は穏やかに接してくれている。でも、一時期は

「立村くんつてやっぱりよくわからない人よね。少し異常なんじや

ない？ 女子を追いかけまわすなんて」と聞こえよがしに笑われた。

評議委員会の時にも先輩達には

「お前、いきなり目覚めるのはいいが、相手もいることだからもう少し気を使えよとどやされる始末だった。

そんな中、本条だけは何も言わなかつた。

黙つて評議委員会に関する説明をこんこんとしてくれるだけだった。

きつと、本条先輩も知つてゐるに違ひない。心密かにあきれているのだろう。

一度植え付けられたイメージを覆すには、人一倍の努力が必要だと、自分でも覚悟していた。

徹底して本条に教えを請い、今以上の自分になれるよう、上総は本条先輩にひっぱられるまま『ビデオ演劇忠臣蔵』に打ち込んでいた。あれだけ演劇関係にかかわりたくない、言い張つていたにと、周りではささやかれ、笑われた。でも本条に認められるためだったら、奇声を上げて松の廊下で吉良を追い掛け回すことくらい、なんでもないことだつた。

「あれだけ立村くんいやがつていたくせに、いい演技してゐたよね。浅野匠之頭役、本氣で松の廊下、切りつけ追いかけていたよね。吉良役の結城先輩も思わず引いていたよ」

ビデオが出来上がつた後、D組を始めとする女子たちからはからかい調子の感想を口にした。何も言わず、黙つていた。  
自分の汚名を晴らすために、あと何ができるのだろう。  
そればかりずつと考えていた。

クラスの連中があえて『杉浦さんとのこと』を突つ込もうとしたなかつたのは、それゆえ不思議なことだった。

。いつその話題が出てくるのだろう、いつ、物笑いにされるのだ

るつ、そればかりが怖くて、自然と無口になつていった。

無意識なのか意識的なのか、貴史がうまくフォローしてくれていた。

「な、立村もそう思つだろ？ ポーカーフェイスしてねえで、少しなんとか言えよな」

「ほら、黙つても立村の言いたいことは大体わかるよな」「その時はうつとおしい以外の何者でもなかつた。

杉浦さん疑惑が出てきてもおかしくない宿泊研修・夜の話題に、大抵の連中は上総に、

「お前は清坂だろ」

「立村、清坂に惚れているだろ」

とつっこみを入れてきたことすら、いらだたしい以外何も感じなかつた。

どうして俺はそんなことに気付かなかつたんだろう。

南雲をはじめみんなが俺の味方だつて伝えようとしてくれたのに。

ただ知らない顔をして俺は軽蔑のまなざしを向けてきたわけなんだ。

恋愛さたに熱を上げる物好きな奴らだと思い込んできたんだ。最低だ、俺なんか認められる価値なんてない。

「杉浦さんとのことは、大嘘だつて分かつてゐるよ。立村が惚れているのは清坂さんなんだろ」

という長い文章の略であることに、昨日まで気付かなかつた。

水を汲み薬を飲んだ。

効くまでには時間がかかりそつだつた。

何度も電話がかかってきたのは覚えている。なかなか起き上がり何度か電話がかかってきたのは覚えている。なかなか起き上がり

ずそのままにしていたら、父が慌てて受話器を取っていた。深夜、台所で冷えた麦茶をがぶ飲みしていたところを見られたらしい。

目が覚めた時、枕もとにはみかんジュースの瓶入りがすとんと置かれていた。

コップも並んでいた。

なんとか、明日は学校に行けそうだった。

でもどんな顔していけばいいんだ？

天然果汁百パーセントのみかんジュースは、思った以上にすっぱかつた。

まだ身体のだるさは残っていたけれど、シャワーを浴びて寝臭さを消し、上総は自転車に乗った。乗つてしまつと後は楽だった。まだ夏の匂いが薄い空気がおいしかつた。品山を出て青潟駅を通りぬけ学校に到着した。大急ぎで教室に向かつた。

「あれ、立村、昨日どうしたのよ。知恵熱でも出したの？」

隣の席でこづえがにやにやしながら上総を迎えた。手招きする。

「何が知恵熱だつて。去年と同じパターン。死ぬかと思った」

「でも今回は一日で復活してきたじゃない。あんたも大人になつたねえ」

「頼むからその言ひ方はやめてほしい」

さて、何をつっこまれるだろう。上総は気持ちを臨戦体制に切り替え、朝自習用のプリンタを学習委員からもらつた。まだ貴史、美里は到着していらないらしかつた。あの一人はぎりぎりなのだ。一緒に来ることが多かつた。近いとかえつて遅刻しやすいとはよく言つものだ。

「そういえば、さつき一年の杉本さんがあんたを探しに来ていたよ。あの子も早いよね。『立村先輩いませんか』って。評議委員の関係なんでしょう」

「頼むからそれを最初に言つてほしかつた」

杉本梨南、いつたい何の用だろう。

「確かこの辺に住んでいるんだよね」

「よく知つてゐるなあ」

上総はプリントを置きっぱなしにして立ち上がつた。一年の教室に行くつもりだつた。こづえは引き止めるように袖を引いた。

「いやね、伝言して帰っちゃつたよ。なんかさ、今日の評議委員会の反省点でね、自分なりにまとめたレポートを持つてきましたから

立村先輩に渡して欲しいって。『先輩』だつてさ。立村先輩だつて、笑つちや「つよね」

「じゃあ今度から、『古川先輩』と呼んでやるつか」

「私は『お姉さま』と呼んでもらわなくつちや」

「しゃれにならないよ」

杉本梨南が持つてきたとこ「レポート用紙一枚に目を通し、ところどころチックをした後、上総はすぐにしまい込んだ。別に特別な内容だつたわけではない。反省点を箇条書きにして、わかりやすくまとめてあるだけだつた。杉本梨南としてはどうしても氣になつたのだつ。別に無理しなくてもいいのにと思つ一方、自分が彼女の立場だつたとしたら同じよつにしただらつとこ「氣もした。

杉本、本当に生真面目だよな。

一生懸命だから、俺とかだとどうしても手伝つてやりたくないんだけどな。

どうして一年の男子連中はああも嫌うんだ?

世の中はわからないよな。

「なにがわからないのよ」

慌てて上総は取り繕つた。

「いや、や、杉本がどうしてあそこまで一年男子に嫌われるのかななつてことや。古川さんはどう思つ? 俺からすると、あれだけ真面目な一年つて珍しいと思うんだけどな」

「仕事はきちんとするし、ひたむきだし、と立村は言つたんだね」「そう、手抜きしないし、とにかく一生懸命なんだよな。男子とか女子とか関係なく、ああいうタイプの人はもつと誉められていいと思うんだ」

「じずえはしじばらく人差し指のつめをかみながら考えていた様子だつたが、

「わかつた。あの胸にひかれたんでしょう」

「え?」

「絶対、杉本さん、Bカップ以上のブラつけているよね」

「何、言っている？」

「やだなあ、立村、あんたも気が付かないとは言わせないよ。先週の金曜日、だいたい今くらいの時間に杉本さんを呼びつけて話していたことあったでしょ。あの時の日、杉本さんの谷間に行つていたの、見ていたんだからね。夏服になつたばかりだつたし、気持ちもわからないことないなあ、とは思つていたんだけどね」

ため息をついて言い返した。

「古川さん、今非常に失礼なこと言つていいって、気付いていないだろ」「うう」

「自覚がない分、やつかいよね。ほら、朝自習のプリント落ちているよ。はい」 無意識で落としてしまつたらしい。慌てて拾つた。  
「でもしあうがないよね、男子はそういうのが定めだつて、この前の保健体育でもならつたからね。十四才の男子は毎日がそのことで頭いつぱいだつていうしね」

「すべての十四才がそういうこと考えてくるとは限らないだろ」「うう」  
言ひ返すのもばかばかしくなり、上総はせりと朝自習のプリントを見直した。社会の年号暗記問題だつた。

「ちなみにね、それ、美里にも見られていたってことを教えてあげるね」

「そりやそりや。杉本が来た時、一緒に清坂氏もいたんだ。評議委員会の話なんだから、一緒に話をすすめるんだから。果たして俺が杉本のことをじろじろ見ていたかどうかまで、確認はしていいけどね」

「まったく、あんたつてばかだねえ、お姉さんは悲しくなるわ」  
出た。いざえの十八番だ。上総は黙つて次の出方を待つた。

「あの後、美里は胸を大きくする体操ないかつて話していたからね。ショックだつたと思うよ」

「いざえの言いかけた言葉は、すぐに遮られた。

「『すえ！ あんた何言つてこるのよー そんなこと、一冊も書つてないじゃない！』

いつのまにか教室に来ていた美里が、机の上に両手をついて怒鳴った。

別の場所でだべつていた貴史もきょとんとした顔で振り返つた。  
「言つていいことと悪いことがあるつて、わかつていい？ 嘘ばかり言わないでよ…」

本氣で憤つているらしに。この前、茶室で「付き合つてている奴いるのか」と聞いた時と同じくら、腹を立てているらしかつた。古川さん、あやまればいいのに。そう言つてやりたかった。

相手方のこずえは冷静沈着だつた。

「嘘じやないよ、私、ちゃんとあの後、先輩たちから『バストアップ運動』について聞いて、教えたじやない」

「なんでこんなところで言わなくちゃ いけないのよ…」

上総が側にいることを全く意識していないようすだつた。

「だつて、美里が落ち込んでいたのつて、先週の金曜日、朝だつたじゃないのよ。なんでかなつて思つたら、美里つてば真剣に『胸が大きくなるにはどうすればいいのかな』とか言つんだもの、なんかあるとは思つたけどね」

「変なことばかり言つのはやめてよね…」

「美里だつていつも言つてこじやない、いまさら知らないふりしたつてね。だつて、あの時の美里、すつじく怖い顔してたよ」

「あの時つていつよ！」

「杉本さんが立村の机にかがみこむようにして、話を聞いていた時よ。立村が座つたままだつたから、もろ、顔にあの大きな胸がぶらぶらしていたじやない。しかもあの子、ノーブラだつたからね。気付いていたでしょ、立村」

「なんこと、知るかよ」

なんだかこずえと美里の口論になりつつある。杉本梨南の谷間を

見ていた記憶は全く残つていなかつた。なぜそんな話で一人が喧嘩しはじめるのかがわからない。上総は黙ることを選択するしかなかつた。

「そんなところ見てるのは、こずえだけに決まつてゐるじゃない！」

だんだん美里の口調に悲鳴じみたものが混じつてきた。こずえは気付いていないのだろうが、隣で聞いている上総にはぴんときた。これは泣き出す前の、微妙なサインだつた。しゃべりつづけているうちに、小さく「き」という声が混じりはじめる、かなり危ない。

大丈夫か、清坂氏。

「こずえの冷静な言葉に、美里がどんどん挑発されてしまい、かつとなつて支離滅裂に叫んでいる様子。貴史の姿を探した。羽飛貴史はけげんそうにこちらの方を見ていたが、入ろうとはしなかつた。女子同士の喧嘩に割り込んだらくなことがおこらないとわかつているからだらう。

果たして美里が、先週の金曜日に上総と杉本梨南との語り合いを見て、なにかショックを受けたのかどうかはわからない。また、胸の大きさにショックを受けて、自分もがんばつて大きくしようと思つたのかどうかもわからない。ただ、いつも見ている美里の様子とは異なつていた。

上総の方を一切見ないで、こずえだけをじつとこちらみつけるように抗議している。

これは、まずい。

完全に、清坂氏、理性が飛んでいる。

でもきっかけは、俺なんだよな。

そんなことしていなくても、やはり、まずいよな。

頭の中で言葉が飛び交い、右往左往している。

「あの、いいか」

息をひとつ吸い、上総は古川に声を掛けた。美里の方は見ないままにした。

「なによ、今美里と私、雌雄を決する戦いしているんだから」「結局、何が原因なんだ?」

「あんたが杉本さんの胸の谷間に見とれてなかつたらよかつたのよ。全くすべきなんだから」

「その記憶つて全くないんだけど。もし、わざわざ風に見えていたら、やっぱり俺が悪いんだよな」

「別に、あんたが悪いとは言わないわよ。自然な十四才の反応なんだから」

「悪い、俺はまだ十三歳のままなんだ。九月が誕生日だからね」少しでも空気を和らげるべく、使いたくなかった誕生日を持ち出した。これでまた弟扱いされてしまうが、しかたない。

「そりだつけ? そりかそりか、あんたは弟分だもんね」

「で、清坂氏はなんで怒っている?」

「そんなの、なんで立村くんまで聞かなくちゃいけないのよー。」

「あの、さ、つまり」

息を吸い込んで、ひいふうみいと心で唱えた。

「俺と、清坂氏と、付き合つてゐるから、もしさうこうことが原因だつたら、あやまつておいた方がいいかな、と思つたんだ」

「え? 立村、今、何て言つた?」

「ずえがすつとんきょうな声を上げた。

「だからつまり、清坂氏と俺は、付き合つてゐるからね」

表情だけはなんとか自然なままで保つたつもりでいた。声も静かに波立たせずにつぶやいたつもりだった。目線もおだやかに、こさえと美里に向けたつもりだった。

すべては『つもり』だったけれど、どうこう風に見えているのか

はわからない。「付き合つているつて、あなたたち、いつから?」

「たぶん、先週の金曜日から」

美里の顔が真っ赤に染まつていぐのに気付いたのはその後だつた。頬が紅潮する瞬間というのを、上総は初めて目の当たりにした。まづいことを言つてしまつたと後悔する間もなく、美里はすつときびすを返して自分の席に走つていつた。ばたんと椅子をひいて座り、ぐつとうつむいた。次の授業、歴史の教科書を取り出して開き、じつと見入つていた。

「ねえ、なによ、美里、どういふことなの?」

大きい声で「ずえが尋ねるが、一切無視。美里は唇をかみ締め、一心不乱に歴史の教科書を読みふけつていた。

はたして羽飛は、と貴史の姿を探すと、顔を露骨にしかめて上総に、人差し指を立てて口に当てた。

「それ以上言つな、ややこやしくなる」という合図なのだらうか。素直に上総は従つた。

あれだけ大きい声でしゃべつていたのに、なぜかクラスの連中は和やかなままだったのはなぜだらう。上総にもわからなかつた。

「なんだか妙な雰囲[気]だなあ」  
「やはりわかるか」  
「おはよつ、りつちゃん」  
後ろから声をかけられ、上総は振り向いた。後ろの席にいる南雲がぎりぎりで飛び込んできたようだつた。遅刻すれすれというのが、いかにも規律委員らしくない。

「なんだか妙な雰囲[気]だなあ」

本条先輩からもらつた盗み撮りテープの内容を聞いているから、南雲がどう考へ、どう感じてゐるかはおぼろげに想像ついた。でもまだ、そのことについて話してはいなかつた。照れも残つていた。

南雲も少しきこちないものの、顔だけはからりとしたままで、

「おととこ、本条さんと話したんだろ」

「一応、全部、聞いた」

「テープの存在を知らない可能性もある。上総はあいまいに答えた。

「どうこう」と聞いた？』

おやらく南雲も、自分が話したことをすべて上総に伝えられたとは思っていないのだろう。盗み撮りされたこと自体知らないのかもしない。短く答えた。

「つまり、俺がこのクラスにいても、かまわないうことかな」田を見て答えられず、うつむき加減になりながら、「なぐちやん、ありがとう」

ひょんな拍子で口に出た。南雲のことを『なぐちやん』とは、一度冗談交じりで言ったことがあったけれども、意識して言葉にしたのは初めてだった。下の名前は『秋世』と書いて『しゅうせい』と読む。自分の名前を呼ばれるのは好きじゃない上総は、あえて、『りつりやん』に似た呼び方を選んでいた。

予想に反して、南雲は何も答えなかつた。

じつと上総を見つめて、うなずいた。

貴史や美里の言葉とは全く違つた、やわらかいものが伝わってきた。

すべての授業が終わるまでの間、上総は南雲と洋楽ベストテンの傾向について語つたり、菱本先生にまた呼び出されて『無断欠席』について叱られたり、杉本加奈子から微妙な視線を送られて考え込んだり、気持ちの中では忙しく過ごしていた。

あえて、美里と貴史には声をかけなかつた。貴史がたまたま、一年生の教室に用事があつたようでは出かけていた、というのもあつた。たぶん、この前の金曜日に告白されたという一年生についてのことだろう。上総も詳しいことは聞いていなかつた。無理やり聞く必要もないと思つていた。

美里の方をなかなか見ることができなかつた。

土曜日に美里は

「しばらく黙つていたほうがいいな

と話していた。

隠す必要はないけれども、言いふらす必要もないと。

本当は上総の内気な性格を知つていたから気を遣つてくれたといふのに、結局は自分の方からさうけ出してしまつた。上総としては、こずえとの喧嘩をうまく止めたかつただけだつたし、それ以上に美里の気持ちがかなり動搖しているのを感じてしまい、とにかくなんとかしてやりたかつた。でも、見事に裏目でてしまつたようだつた。

「立村、美里に声かけてやりなよ」

帰りの会でこずえがささやいた。

「杉本さんの胸にぼーっとしていたのは別にいいけども、付き合つていることを言い出したのはあんたなんだからさ。それくらいの責任は取りなよ」

「だから何が責任だよ」

「胸が小さくても好きだつて言つてやりなさいよ」

「気にしているのは古川さんのほうだる。よくそんなことに見てくるよな」

放課後は評議委員会だつた。隣同士に座る。いやおうなしへ隣り合つになるとになる。気持ちは重たいけれども、なんとかなること心につぶやく。

「それにしてもね、立村、あんたの方からといつてはね。お姉さんは安心したわよ。弟よ」

ふつと上総も言い返した。

「お姉さん、今度はあなたの現実問題について考えた方がいいんじやないですか」

やんちゃな言葉を口にする寸前で止めた。

まさか羽飛が一年生の女子と付き合つかもしれないってことを、ずっと片思いしている古川さんが知つたら、冷静でいられるわけないじゃないか。そこまで俺は汚いことをしたくない。眞実を教えてやるのがいいと、南雲は言つたけれどもそれもよしあじだよ。

掃除が終わつた後、美里を探したがすでに、教室を移動してしまつたようだつた。いつもだつたら

「先に行くね！」

と声を掛けてくれるといつのこと。相当ショックだつたのかもしれない。だんだん不安が募つてきた。でも顔には出したくなくて気ままに南雲と話をしていた。委員会関係の話がほとんどで、テープに録音されていたようなことは出てこなかつた。

「じゃあ、これから評議があるから」

「わかつた、また明日な」

南雲がいなくなつた後、教室には誰もいなくなつた。羽飛が戻つてきたのは南雲とすれ違ひだつた。軽く「おつかれ」と交わす言葉が耳に入つた。

自分が南雲とちょくちょく話をしていること、面白くないのかもしない。貴史は軽く手を上げて、上総の隣に立ち、窓を見下ろした。

「これから委員会だる」

「そう。評議委員会」

短く答え、上総も窓を見下ろした。中庭には一年の女子がたむろしてきやこきやいと花を摘んでいた。もちろん雑草のあかつめくさや露草ばかりだつた。一年の女子とは異なつた嬌声が、幼く聞こえて思わず上総は耳を澄ませた。貴史がぽつりとつぶやいた。

「俺たちも年をとつたよな」

「確かに」

「なんだか一年前とは思えないよな」

「全くだよな」

ふけた会話を交わした後、時計を確認した。三時半にそろそろ差し掛かる頃だった。

まづい、そろそろ評議委員会の開始時刻だ。

二年A組の教室に集合しなくてはならない。

本条先輩にカセツトレーダーを返さなくてはならないし、夏休み合宿についての話し合いもしなくてはならない。

上総のしぐさに貴史も気がついたらしく、窓をゆっくつと閉めた。

「もう行くんだる」

「ああ、なんだか気が重いな」

ふふっとに貴史は笑い、両手を上げてバンザイした。

「ははあ、立村、お前美里に嫌われたと思つてているだろ。今朝の騒ぎでさ」

「そんなの知るかよ」

「なあに、あいつ図星指されてパーティになつてしまつただけだ。安心しろよ」

「安心するもなにも」

言いかけた上総を押しとどめるよし、

「一年の女子には手加減しろよ。俺がわかるのはそのくらいだ」

「一年の女子つて、いつたい誰だらけ。」

杉本のことか。

考えがまとまらぬうちに貴史は威勢良く教室を出て行つてしまつた。上総も急がなくてはならなかつた。すでに一分経過している。入つていつたらたぶん、本条評議委員長にどやされるだらけ。上総は窓に鍵をかけたのち、急ぎ早に廊下を走つた。

思つたとおりだつた。時間厳守で始まつていた評議委員会。上総が到着した時には壇上の本条先輩から物言わずにチョークを投げつけられた。ちびたまるつこいものだつたからぶつかつてもたいした事はないのだろうが、うまく避けられた。且で軽くあやまつておいで、すぐに一年生の席についた。

隣にはいつものように美里がノートを取っていた。評議委員会ノートは大抵美里が筆記してくれるものだった。一応上総もメモは取る。ただ取り捨て選択が「うまく行かず、『字だけはきれいなのが、内容がわかりづらい』状態になってしまつ。その点美里は、わかりやすくポイントを押さえてくれるので、非常に助かつた。

「どのくらい、進んでいる?」

「今、始まつたばかりだよ」

短く答え、美里はちらつと上総に田を走らせ、すぐ戻らせた。やはり、なんだか、妙だつた。

でもこれ以上私語したら、今度は本条先輩から直接長いチヨークが飛んでくるだろう。さすがにそれは避けたかつた。本田のテーマ『七月末の評議委員会合宿』について、本条評議委員長の発言をじつくりと聞いた。どうせ、ある程度進んだら、呼び出されて黒板に書き込みをすることになるのだろう。

まださほど、合宿についての予定は決まつていよいよ、さつと説明をしただけにとどまり、本日の評議委員会はお開きとなつた。杉本梨南が苦労してまとめたらしく『一年学年集会』のレポートを本条に渡すため腰を浮かせた。と同時にいきなり後ろから腕を捕まえ引っ張られた。

A組、C組の男子評議委員である。

「あ、の、さ、立村。ちょっと来いよ」

「どうした?」

言われるがままに後ろに行くと、今度はB組の奴までいた。にやにやして、取り囲み、でも声は潜めて。

「どうとづ、なんだ?」

「何がだよ」

「聞いたもんな。のことわざ」

「だからなんだよ、わかりづらにな」

「よくぞ落としたよな」

「しつこ、何がなんだよ」

氣だるい感じで答え、本条先輩の姿を探した。まだ教壇の上で二年生同士、何か話している。いるうちに渡さねば。

「しつかし、立村も長かったもんなあ、報われない時代がさ」

A組評議委員は、わざとらしくため息をした後、ぽんと肩を叩いた。

「ほんとほんと。切腹したい気持ちだったのは、よおくわかるだ。

浅野匠之頭」

B組評議委員が続ける。

「でもなあ、やつと、お前も名誉回復できるな。よかつたよかつた」なにやら、祝福をされているらしく。疑惑につつも上総はもう一度尋ねた。

「だから、お前ら何を言いたいんだ？ 持つて回つた言い方しないではつきり言えよ」

「どうぼにはまつたと氣付いたのは次の瞬間。遅すぎた。

「いいのか？ はつきり言つて」

「とにかくしばらくは新婚氣分を味わいなつてな」

「一年評議の公認力ップル、とうとう誕生！ とうとう来る時が来たつて、感じだなあ！」

もつ、言葉の響きはひそやかなものではなかつた。たぶん他の学年にも聞こえただろう。ぽんぽんぽんと三人に、頭や肩背中を叩かれながら、上総はしばらくふらついていた。逃げるのもみつともないし、否定することもできない。怒るのもなんか変だ。どう振舞つていいのか、どう言い返せばいいのか、言葉が見つからず同じことばかりつぶやいていた。

「だから、そんな、大それたことじやないつてわ」

しばらぐ男子連中にやいのやいの言われた。一年生はひそとささやき、二年生は納得顔でうなずいていた。いつのまにか、情報は評議委員全員に広まっていたらしい。たぶん、上総の休んでいる間、本条先輩が誰かに話したのだろう。それとも金曜の朝、上総が

言つた言葉を他組の連中が聞きつけ、広めたのかもしれない。とにかく、『立村上総と清坂美里は付き合つてゐる』という事実が伝わつてゐることは確かだつた。

自分でばらしてしまつたのだから、『うなるのはわかつてゐた。もつと、笑われるだらうと思つていてた。

なのに、なぜかみな、冷静に受け止めてくれてゐる。

「あとで、どういう感じで付き合いかけたのか、言えよ

「そういうんじゃないってさ」

だんだん教室から一人、一人帰つていく中、ずっと待つてゐる女子がいた。

美里と、杉本梨南だつた。

ずっと椅子に座つたまま美里は本を読んでいた。教科書ではなかつた。文庫本だから何なのかわからなかつた。側によつて声をかけゐつもりだつたが、側でじつと待ちつづけてゐる杉本の方をまず優先した。

「杉本、朝もらつたレポート、良かつたよ。本当は本条先輩に渡そうと思つていたんだけどさ。明日、見せるよ。やはり、杉本は頭が切れるよな。うらやましい」

お下げ髪をふらんとぶらさげ、大きな瞳をきゅつと絞り込み、にこりともせずに杉本は答えた。

「ありがとうございます。私、どうしても書きたかったんですよ」

「わかつてゐるよ。杉本が一生懸命やつてゐるつてことは、俺もよくわかつていてる」

いつのまにか自分が笑顔でいることに気付き、上総は戸惑つた。いつもそうだつた。杉本梨南に話しかける時にはいつも、にこやかになつてしまふ自分がいた。本条が言つとおり、ひいきしてゐると思われても仕方のないことだらう。でも上総が自分に素直になると、どうしても杉本に対してのみ、かばつてやりたくなるし、誉めてやりたくなる。これは好きとか嫌いとか、付き合いたいとかそういうものではなく、『ごくごく自然なものだつた。笑顔を見るとほつとす

るとか、そういうのではない。いつもぶすっとした顔で、にらみつけるように話す杉本のまなざしは、確かに怖い。でも、その奥で、上総にしかわからない不安な気持ちが見え隠れする。絶対にうまくやらなくちゃ、絶対にこの人には認められなくちゃ、そう必死に、あがいでいる姿が見える。

かつての自分を見ているようだった。

小学校時代のいじめられた記憶を、打ち消そうとしてあがく、一年生の頃の上総そっくりだった。

古川こずえは上総に

「あの胸にぼーっとしているんでしょう」

と言ったけれども、それだけは断固として抗議したい。杉本がどれだけ、目立たないようになんてががまないよつに、猫背で歩く癖があるのにだいぶ前から気付いていた。まるで自分が、クラスから浮かないように、いろいろなグループの連中とうまく付き合っているようだつた。

杉本が男子だったら、別だつただろう。

自分に似た奴を好きになんてなれなかつただろう。

でも杉本梨南は女子だった。あまりにも不器用な一年生だった。

同じ辛い思いを少しでも、わかつてやりたい。

でも、この時だけはもうひとつ、大切なことが残つている。

「あの方、杉本。明日の朝、詳しいこと説明するから今田は早く帰つた方がいいよ」

はつとした表情で、杉本梨南は上総を見返した。

「私、家近いから、遅くなつても平気です」

「そうか、でも、今日だけは、どうしてもだめなんだ」

上総はきつぱりと告げた。

「今日は清坂さんと一緒に、用事があるんだ」

坐つていてる美里に、聞こえるよう、ゆっくりと告げた。

「なんですか。では明日、立村先輩の教室に行きます

「待つているから」

よくわけのわからなさそうな顔で、杉本梨南は一礼すると、美里の方にも小さく会釈し、教室を出て行つた。

ドアが閉まり、杉本梨南の足音が消えたといひで、上総は美里の隣に戻つた。身動きひとつせず、美里はひたすら本を読んでいた。聞いていたのかどうかわからなかつた。

「あのさ、清坂氏」

「いいよ、先に帰つて」

「まだ、怒つているのか」

静かに上総は声をかけた。波打たずに、聞こえた。

「怒つてなんか、ないけど」

「だつたら、帰らうか」

しゃがみこみ、美里の坐つている机にひじをついた。下から見上げる感じで美里の顔を覗いた。

「やだ、見ないでよ」

「やはり怒つているんだな。悪かつた。俺が変なこと言わないほうがよかつたのかな」

「そんなことないよ、立村くん。びつしたの。なんだか違つよ、今日は」

「お互い様だらう」

何の本読んでいるのか、と、カバーから透ける題名を読み取ろうと覗いた。露骨にそうしたわけではなかつた。でも美里にとつては不愉快だつたのだろう。さつと綴じた。

「変なことしないでよ、立村くん、何か熱で頭おかしくなつちやんつたんじゃないの。もう」

「おかしくなつたのか、どうなのかわからないな。三十九度くらいまで上がつた」

何度かくわえて計つた体温計は、午後までなかなか下がらなかつたことを思い出した。

「うそ、三十九度つたら、起きてられなによ

「いつもそのくらいなんだ。去年の今『』もそうだった」

美里はおそるおそるといつた風に、上総のひたいを見つめた。

「なら、今は、平氣なの？ 具合悪くないの」

「夕方には下がった。だから、学校にも平氣で来られたんだ」

わざとはつきり、美里の顔を見つめながら答えた。

美里の表情が刻々と変わっていくのを知るのは正直なところ怖かつたけれども耐えた。いつも以上にやわらかく答える努力をした。

「やっぱり、立村くん、まだ熱出しているんだよ。きっと」  
本をかばんにしまい込もうとした拍子に、ちらりと表紙がはがれた。美里は気付いていないようすで、すぐにカバーをかけなおし、中に入れた。古本なのだろう。薄汚れた文庫本の表紙に印刷された題名を、上総は読む前に気付いた。

「あのや、今の本つて」

口に出そうとして、すぐに飲み込んだ。

「なんでもないよ、なんでもないつたら」

「それならいいんだ」

窓を締めようと、上総は背を向けた。

フィツジョラルドか。

聞こえないように、自分の中でつぶやいた。

『華麗なるギャツビー』 邦題がそうなつていた出版社もあつたはずだった。何作か訳者違いの本を読み比べていた。美里が持っていた文庫本は一番よく出回っているタイプのものだった。  
愛読書だと知っていたのだろうか。

青大附中の面接試験で、上総は好きな本について何でも答えるようになり、『グレート・ギャツビー』への思い入れを語り尽くした。たぶんあれで受かつたのだろう。時間オーバーするくらいにしゃべりつづけたことを覚えている。

愛した女ディジーを取り戻すため、毎晩派手なパーティーを開き

つづけ、やがて成功するギャツビー。しかし最後は裏切られる悲劇について、ありふれた感想を語った。

貴史には話したことがあるかもしれない。聞いたのだろうか。決して誰もが好きになれるような小説ではないのに。

好みの作品じゃなさそうなのに。

言えない言葉が、次から次へと咽の奥にたまるとんとみぞおちに落ちていった。

椅子ががらりと鳴った。振り返ると美里が、準備を終えて上総を待っていた。

「じゃあ、行こうか

硬い表情をしたまま、美里は頷いた。思い切ったように大きく息を吸い込み

「立村くん、あのね」

はたつと言葉を切った。

「どうした？」

「みんな、もう、気付いていたんだよ。ごめんね。私もわかつていたのに」

「え？ 気付いているって」

「昨日の段階で、D組の男子、みんな知つていたって。でも「堰を切つたように美里は言葉をついだ。

「みんな、立村くんが言つままで、知らないふりしてあげようつて、決めていたんだって。貴史が、さつき、そう言つていた。女子にも内緒にしてあげようつて、言つていた。いやな思いしないようつて、男子がみんな、決めていたんだって」

南雲発言のテープから前もって聞いていたことだった。上総は驚かず相槌を打つた。

「立村くんが加奈子ちゃんに告白なんてしてないって、私、知つていたよ」

「え？」

「去年の冬、噂立つ前から知っていたよ。だつて私、杉浦加奈子ちゃんに確認したんだもの。加奈子ちゃん、立村くんに付き合い、かけられてないつて言っていたもの。どうしてあんな噂が立つたのかわかんないけど、今ならどうでもいいよね。だつて、わかっている奴はみんな、わかっているもん。D組の男子も、貴史も」

私も、とは言わなかつた。

「だから、無理しなくていいんだから。D組、私と貴史と、男子の連中だけはみんな、立村くんの味方なんだから。立村くんが一生懸命やつてこるつてことは、みんなすっごく、よくわかっているの」

言葉をさしはさもうとするが、美里は首を軽く振つて続けた。

「さつき、杉本さんに話していたでしょ。あの子、一生懸命やつているつていつも立村くん言つているよね。私もそう思つよ。だから、先週の金曜日、一生懸命杉本さんに教えていたんだつて、わかつている。こずえが言つたみたいに、変なとこ見ていたなんて、思つてないから」

「ああ、今朝のことか。あれは失礼な話だよな」「何気なく美里の胸元に目が行つたがすぐに逸らした。

「私、言いたいのはこれだけ」

両手をぎゅっと握り締めたまま、美里はゆつくつと、上総の瞳を捕らえたまま。

「杉本さんの面倒を見てあげている立村くんと、同じ田をしているの。あつと、私、立村くんに」

「じつがりおちた言葉を拾い上げようとするよつて、ひつひつと下に目を走らせた。無理して笑顔を作りつつしてこる。肩で息をしている。

「じゃあ、また明日ね」

急ぎ早にドアを開けて美里は帰つとした。ノブに手がかかる。

好きなんだろ、付き合つちやえよ。

お前は清坂に惚れているんだろ。  
見るからにばればれじゃないかよ。

D組男子たちがぶつける言葉に戸惑っていた。

貴史、南雲の言葉と、自分が感じている美里への思い。

今の今まで繋がらなかつた。

そばにいて真っ赤になつてしまつとか、夢に見てしまつとか、そういう感情はなかつた。茶道室で一緒にいた時も、ふたりつきりでいたのに。手を触れたいとも思わなかつた。

なぜだらう。

美里の言葉で硬く引き絞られた結び目が解けた。

好きとか、嫌いとか、愛しているとか、そんな言葉じゃない。自分の味方でずっといてくれた美里を、わかつてやりたい。

痛みを少しでも減らしてやりたい。

口に出せずにはいる言葉を、汲み取つてやりたい。

杉本梨南に感じている感情に限りなく似ている。名前をつけられずにはいた。

上総が杉本梨南に懸命に教えていた時、美里はかなりきつい目をしてにらみつけていたといふ。こずえはその時に「杉本さんの胸にぼーっとしていた」と決め付けた。また美里も、「胸を大きくしたい」などと口走つていたといふ。でも、美里が見ていたのはそんなもんではないだらう。

美里が言つたとおり、

「杉本さんの面倒を見てあげている立村くんと、同じ目をしているの。きっと、私、立村くんに」

杉浦加奈子との告白騒ぎに巻き込まれても、散々女子からはあきれられても、美里はきっと、同じ目をして自分を見つめてくれていたのかもしねない。

D組の男子連中が早い段階で噂ががせねただと理解してくれていたこと、貴史が上総に内緒にしようと手を回してくれたこと、南雲が反発して本当のことを話してくれたこと。ありとあらゆること

が繋がっていく。

本条の言つとおりだつた。

「お前、ガキだよ。ガキだから、守られているんだよ」  
染み通つた。

恋愛感情なんてわからない。もしかしたら清坂美里のことを好きではないのかもしれない。でも、美里の動搖した様子を見ていて、たまらなく助けてやりたい、わかつてやりたい、そう感じたのは本物だつた。つい、言うつもりのなかつた、「付き合つている」という言葉を口走つてしまつたのも、美里を泣かせたくない、ただそれだけの気持ちからだつた。

気付いたとたん、勝手に体が動いた。  
美里を呼び止めた。  
声が出た。

「それならさ、俺は、杉本よりもうす」し、清坂氏のこと、ひいきすれば、いいつてことだろ

びくりと動かなくなつた美里に近寄つた。

「ひいき?」

か細く、美里が答える。

「本条先輩に言われたんだ。『お前、杉本のことをひいきしているからな』ってさ」

「なんだ。わかつているんだ」

「だつたら、それ以上、ひいきすれば、いいんだよな。それが、付き合つつて、ことだらう」  
自分で思いつくまま、とつとめなく話しているのが情けない。  
必死におだやかな口調をつくらうけれど、どうしても早口になつてしまつ。

「それなら、俺もできるからさ」  
うつむいたまま、美里は頷いた。言葉を発さなかつた。怒つた  
肩が少し下がりかげんだつた。身を硬くしていよいよす。  
右手が

ノブにかかつたままだつた。

『付き合つ』といふ言葉、方法はわからないけれど。  
D組の男子たち、貴史、南雲たちが俺にしてくれたよつた。  
清坂氏の味方でいることない、できるはず。

上総はためらいがちに、重ねた指先でそのノブをひねつた。  
自然と指先が触れ合つた。  
伝わってきたのはしめつた温もりだつた。

終

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6867e/>

---

水無月の夕立～青潟大学附属シリーズ中学編

2011年1月1日02時56分発行